△先日よしゑの身上から一同揃ふて尋ねでよふとゆふ事でありましたが本日平野松お留守で有ります
から如何で有りませうかと申上げ

さあ〳〵なあぜん〳〵に尋る事上を、これ日をおくれたる、みんなうちそろふてさとせんならんから、みなわかりある、あちらこちら何よさとした處が、さしづ筆にとつて咄しはとんとどむならん、心だけとゆふ心にはたらき、心にどれだけゆいきかした處が、みんな心からくるしみとふるりは天然自然の道とゆふ、どふでもこふでもかんなんふじゆとふりてくれるは一代の道のだいとゆふ。

△みな〳〵揃いました上もふ一度御尋ねに出ました
らよろし御座りますかと申上



さあ〳〵もふ度〳〵、しいかりと〳〵本部とゆふ一人も不足のないよふにして、萬事の處尋るよふにするがよい。

△明治三十五年七月廿日過日の御差圖より一人も不
殘願ひ出よとの事に付御願

さあ〳〵だん〳〵これまでの處〳〵、ながらくの身の處に日々ふじゆ〳〵、ふ自由でもふ半季じかひ、身の不自由ながらもつとめ、日々の事でありた、みなのこらずはなしせにやならんと〳〵とどふもならん、あちらこちら事情どふもならなんだ〳〵、ぜん〳〵一つもふこれでよかろふとおもふ中、まだ一人も不足なりてはならん、ふそくありてはならんとゆふ理きゝわけてくれにやならん、これだけにんとゆふ、心とゆふ理もあつまりて、どんな日もありた、國々にどんなりもあつた、これよ

りよく心一手一つとゆふ、これが第一理である、心の理と道の理としつかりあはせてくれにやならん、世上に如何なる理あちらこちらどふなろふ、かこふなろふかしらんとゆふ日がきたらどふもならん、そこできゝわけにやならん、どふゆふ事もきゝわけにやならん、これからはどんな事もこんな事も一つ助でいかにやならん、道にあちらもそひこちらもそひ、十分とおもふがころりとまちがふてある、まちがひからまちがひができる、この一つの理はやくさとさにやならん、おもへどどふもならん、どふなりこふなり心そろひ人そろひこれ一つ定めてくれ、なにもかざりは一つもいらん、ぜん〳〵よりもさとしたる、そとの錦より心の錦、心のにしきは神ののぞみ、かざりは一つもいらん、又みなの中十年祭はつれてとほりた、又二十年祭一つ



心にはこびかけてある、そりやなけにやならん、なけにやならんがどんな事してくれ、こんな事してくれとは一つもいはん、これより一日の日もどふしていかふかしらんとゆふ心つのりてくれ、皆心さだめてくれにやならん。

ぜん〳〵よりもさとしたる、あちらも不足、こちらも不足、ふそく〳〵ではさとした處がかきとりだけではそふかとゆふだけのもの、ことばきゝたなら、心さだまるかさだまらんか、一人〳〵の心にある、一人〳〵心もちて道をつたふてくれにやならん、どれだけ十分これだけ十分とおもう心はまちごふてある、よふきゝわけもふきるものなけにや、もふのふてもかまわん〳〵、うつくしいものきたいとおもふ心がころりとちがふ、一代といふはこれ一つ、よふしやんせにやならん、ざんねん〳〵

でくれたる處おもへばどんな事でもできる、たゞ一日のゆさんもよい處へゆいた事ない、でれば人にわらわれる處よりでた事ない、皆その心ならあんじる事はない、世界から力いれてきても、しんたんをしへ、しんたんの心あればぬいたつるぎも、さやもなくとゆふは、眞實神がうけとりたるからしんたんをさまる、これきゝわけ、人にてつとふてもらはんならんよふではいかん、てつたふとゆふ力もつてくれ、これが第一やで、これはつかみさがしたよふではあるけれど、これだけはやくきかしとふてならん。

△引續て

さあ〳〵これよふきゝわけにやならんで、もふこれだけの道といへば大きおもふ、おほきい道はけがをする、細い道はけがはない、大き道でけがはある、細い道はけがはない、細い道はけがなうとゆふは、あぶない〳〵とゆふ心をもちてとほるからけがない、世界なんの心かけづして通ればどんなけがあるやらしれん、これだけ〳〵道ついてあるのにこふゆふ事ではと、心ぼそいとおもふ、なか〳〵そふやないほどに〳〵。

△押て御指圖の次第一統相談して頂きますと御願

さあ〳〵一つは答へにやならん、さあ〳〵これだけみなみなもふ道の爲とおもふやこそ、遠く道へだてゝあつまりた道の理はよほひやない〳〵、これからとゆふ、これから兄弟とゆふ、兄弟なら兄弟の心なくば兄弟とはいはん、心にとりてはいけんとゆふ、かわひこそいけんもする、これけつこふやなとおもへばけつこふ、これだけかんなん通りているのにと不足らしい心で

はならん、人のなんぎ心にかけ、いかな事もたすけやい〳〵、これだけ心にかけ、本部〳〵といふ、そらせにやならん、なれどがまんすればどんな事もできる、がまんはあと〳〵にこたへて心あぐさまにやならん、なにをもつてきたさかひにどふするとゆふ事はない、心にけつこふといふ理をうけとるのや、けつこふは天のあたへやで。

△しばらくして

さあ〳〵もふ一言〳〵、こゝまでほんに本部地場ひろなつた〳〵といへば、これよりどれだけの事やるやろふとおもふ、かりふしんといふ〳〵、末代のふしんは一寸にいかん、ことしにたてゝ來年こぼちてもかまはんといふよふならうけとる、たいそふの事で世上のまよひの臺になつてはどふもならん、ほんのかりやにして、けふしてあすにとりかへてもおしい事はないといふよふなら受取、そふすればすぐにかゝらんならんやろふとおもふ、それは三年五年十年さきでもよい、皆たのもしい〳〵心そなへばうけとる〳〵、なく〳〵するよふでは神がうけとれん、百萬のものもつてくるよりも一りんの心うけとる、これだけきゝたらどんな事もわかる。

△押て先に注意さして頂きます

さあ〳〵兄弟とゆふ理であろふ、中にも兄弟一れつ兄弟はいふまでこふして道とゆふ、遠い處國處遠く處いとはずよりよふた理は、うまれの兄弟も同じ事、どこそこはどふ〳〵とゆふよふではどふもならん、一つの心にをさめ、そんならたゞ一口にたがひたすけやい、たがひたすけあひの中にもさき〳〵つくした

理を見わけにやならん〳〵、助けにいてたすからん事ある、これきゝわけ、道の爲にこふなりたか、道の爲にこふなりたかとゆふ心と〳〵の理をあはせるは兄弟の道、これだけみてやらにやならん、又見てもらはにやならん、これだけしつかり〳〵。

△暫くして

さあ〳〵もふ一言〳〵、どふいふ事もさとしておく、たいてい〳〵どれだけのかりや〳〵、地所といふ地所の處しばらくじつくりしておくがよい、またしゆんがきたならひとりできてくるこれだけ鳥渡さとしおく。

△明治三十五年七月廿三日御供金米糖を一般へ出す

事には本部に於て紙にしるしを打て出す御願

さあ〳〵なにかだん〳〵皆尋にやわからん〳〵、今の處といふ



はどふなりこふなり、一つぜん〳〵一寸さとしたる、一時どふといふはなんであろふ、そふぞふの心とゆふ、どこからどふゆふ事とゆふ、こんな事はちいさい事や、こんな事くらいやない、皆心にをさめてくれ、當分さしゆるしたる、第一事情もふすつとした事、第一おぼりたる事あろふ、今一時こふといふやみな〳〵のもの大變心にやむ、是迄かはひ〳〵でゆるしたる、ごくといふごくで皆たすかるとおもふている心、これは心やすめのしるしや、どれだけのものいつてあるか、いつてないかこれきゝわけ、皆しつているやろふ、どんなものも皆たべるものも同じ事、何もごくきくやない、心の理がきくのや、むつかしい事せいといふは皆々の處そふぞふをさめにくい、大きしやんもつてくれ、大き心もてばどんなはたらきもある、まさかのと

きには月日の代理ともいふたる、こゝ迄の心はすはろふまい。
さあ〳〵今の處、どふなりこふなり、まあとほりよいよふにしてとほるがよい、通りにくい事せいとはいはん、どふでもこふでもあとへひくにもひけん、むこへゆくにもいけん、戰場へのぞめば心すはるやろふ、理とゆふもの治めてくれ、ことしうまれたものも百年いぜんも同じ理をさめているか、これわかりたらいかなはたらきもあるほどに、どんなはたらきもあるほどに。

△押て本部から直接信徒へ出す事御願

さあ〳〵これをよふきゝわけ、あたへといふものは與へる心なくばならん、あたへのない處へ何もあたへはありやせん、これだけ心にもつてくれにやならん。



△しばらくの處包で出す事と申上御願

さあ〳〵つゝんで出す事も今迄も同じ事〳〵、どふしたかて一時どふゆふこふゆふ、一さかりとゆふ〳〵、ひとさかりすんでしもたらなんでもない、ぬけられるだけの心もつてぬけるがよい、又々一日の日があるとゆふ事前々よりさとしたる〳〵、これだけしつかり皆の心にもつてくれにやならん。

△しばらくしての御さとし

さあ〳〵これ〳〵鳥渡ひとゝほりだけ、ほんのかなめだけさとし、ひとゝほりだけさとしたる、みな〳〵の心におさめ、何かどふゆふ處からどふゆふものぞいている、ついてくるやらわからん、親切とおもふたらころりとまちがふ、一人や二人じやいこふまい、十人なら十人あるだけほんにそふやなあといふ、

一手一つこれだけさとしおこふ、どれだけふしぎとおもふ、これだけこふとのこらずのこらずよりよふてすれば、そふぞふありてもあんじる事いらん、たゞかくしやいつゝみやひする中に、さびありては照す事しにくい、どふでもこふでも一つ助のあかるき心もつてくれ、そこでどんな事かはりた事ありても、みんなのこらず〳〵してしたらよふてもわるても、どこへうらむ事はないが明きらか道とゆふ、これだけさとしたらどんな事もわかるやろふ。

△明治三十五年八月一日大豆越山中卯藏氏本部青年の方へ加へて頂く事御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ〳〵もふいづれ〳〵いづれとゆふ、みんなこれもふ尋る、みな〳〵事上これなか〳〵年々ふるいもの、ふるい中から一つりなれど、こふとこゝろさだまるものまで、どんなものでも同じ事、精神定めて又こふとゆふはゆるすまでのもの、又にん〳〵の心にんにん心のり、こふと定まつたならいつなんどきなりと、さあ〳〵許おこふ。

△明治三十五年八月四日上田奈良糸様昨夜より腹痛に付御願

さあ〳〵〳〵尋る事情〳〵、尋る事上にも一つだん〳〵事上、さあ身の處へかゝる處、いかなる事とをもふやろ、さあ〳〵どふもこふもなんともどふもゆゑん、はなしにもつたへられん事上、よくきゝわけにやならん、もふいづみきつて〳〵どふもならん、いづみきつてもふ一人とゆふ、一つり何ほどいそげどもどふもならん、いづみきつて身上さしづとゆふ、ゆわづでもた

にさしづなけにやならん、尋るからさしづ、もふ一人〳〵だん〳〵いそいで〳〵なれど、とんといづみきつてどふもならん、いづみきつていればどふゆふりとみな〳〵をもう、たゞ一人の處きゝわけ、道とせかい一つの理たてやい、これきゝわけてめん〳〵年限つとふたり、どふでもこふでもたてにやならん、たてさゝにやならん、たてささにやならんがよふきゝわけ、もふ一ケ月なんぼふ日もふだん〳〵日がちかづいてある、又半季のかゝりとゆふ、みなきゝわけにやならん、もふわずか〳〵これより席とゆふ、さづけとゆふ、又さしづとゆふ、又つとめにやならん、つとめさゝにやならん、もふいづみきつた處心はらすはどふゆふ事、もふ一人の心すみやかはれにやならん、もふあと〳〵もふあれだけ、一人ぐらしで年くれさしたる處、よふい



やない〳〵、もふ此元々とゆふはどふにもこふにもならん處からたつてきたる、もふ一人の處十分はこびきつてくれにやならん、もふならん〳〵で、一つへり二つへりへつて〳〵へつてしもたらどふなるか、だん〳〵こしらへるにはひまがいる、それではみなのものきのどくや、ぜん〳〵にもさとしたる、もふ百年生れる同じ事〳〵、心もつてくれにやならん、もふ席はじまれば席たびごとにはこんでみならいの心なくばならん、又一つ十分〳〵はこばにやならん、はこびきつてやつてくれ、一人になつてからどふもならん、年限いづみ〳〵いづめば道のさかんとわゆゑまい、心さかんは道のさかん、もふたのしみの心十分もつてくれにやならん、こゝから一とことき、わけ、席はじまるきゝならひみならひとゆふりあろ、その事上よくきゝわけ、

いづみいづんではならん、席一日の日とゆふ、なんぼふせつなみでも、どふでもこふでもつとめさしたる、もふあとあと定めかけてくれにやならん、ながい心ではならん、ながいこゝろでゆだんはついをくれやすいものである、心によのめもあわんとゆふは、一日の日もながい、これ治まりたら心治まるやろ、これだけさとしおくによつて、身上の處あんじる事いらん、一人のものあゝとゆふよふではならん、よふしやんしてくれ、一人ぐらしよふいやない、人間に一人ぐらしとゆふりきゝわけてくれ、もらいうけたるりあればこそ、一日の日とゆふりある、もふどふやしらん〳〵ではならん、一つり治まらにやならん〳〵りある、人間心とゆふはとんといづましたるりから心にかゝりたる、これよくきゝわけ、もふどふやしらん〳〵とゆふてはならん、もふなつてからどふもならんで、これをよくきゝわけてくれ。

△押て事務初りましたらみならひとして御席へでゝ
被下様に本人につたへる事で有りますかと申上

さあ〳〵みな尋にやわからん、さいしよふから一つ同席はいこまい、一とまあしきりて、それ〳〵心と〳〵つきそいて、どふやでこふやでと心にとくしんさしてくれるがよい。

△明治三十五年八月十日十教區取締員の事上に就て
は先々へ出張の御許御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、だん〳〵これせかいとゆふであろ、いろ〳〵あちらのせつ、こちらのせつだん〳〵事情かさなりたる處、よふ一ことはなししておこふ、みな〳〵の心にきゝておか

にやならん〳〵、又はなししておかにやならん、まあ遠い處それからそれへつたへ道とゆふ、又先とゆふ中に一つのこんなんとゆふ〳〵、中に一つ理これも一つよくきゝてはなしとゆふ、又滿足さゝにやならん、滿足さゝにやならんが道といふ、唯一つとゆふは何度の中にもさとしおいたる、同じ一つの中わがさへよくばよいといふよふでは兄弟とはいへん、此理を一つきゝわけて心に治めするなら、同じ水ながれる、ちからしだい力しだいにもだん〳〵ある、此理よくきゝわけにやならん、どうでもなるどふでもいかん、國々處々鳥渡でてはなしするにもきかすにも、心に滿足あたへてやらにやならん、滿足あたへるに物をもつて一事にどふせい、なか〳〵そうはできん、又一つ處々そらかしこやこうかしこや、いちいち尋ねられる處もある、な



んぼ尋ねられてもおめおそれは一つもいらん、つきそふていくものある、つきそひはたれがするか、天よりつきそふている、こふゆふ道理であると何をいはれてもさからふ事いらん、さからはずして此心もつてとほる、なにもおめおそれは一つもいらん、又一つ皆々の力にも樂しみにもなる、さあ〳〵國々まわるは外からまはらん、御地場とゆふ本部員とゆふ、これ中にはなしきかにやならん、此道とをい處へゆけばたいそふである、たいそふなれど大そふの中からでゝくる、世界の大そふをもつてでゝくるをきゝてやらにやならん、きゝてやれば皆々わかる、遠い處へゆく今一時の處こんなんや〳〵、理のあつまる處心から心あつて、できたできたる處これ兄弟とゆふ理、これから又でこす處何もめんじの理はいらん、あんじる事いらん、あんじ

たぶにやきりはない、廣き心もつてとほるがよいあざやかゆるしおく。

△押て青年つれて出る事御願

さあ〳〵青年も一人ではなろふまい〳〵、心のたのしみ心のたより、遠い處いた處々名稱はかりならよい道中とゆふ、又々青年とゆふあちらもこちらもかはりよふてつれて通るがよい、事情さあゆるしおこふ〳〵。

△明治三十五年九月六日永尾芳枝身上御願

さあ〳〵尋る處〳〵、尋る處にはよほいならん事上、身上から尋る、尋るからさとしおこふ、一つ心よく〳〵事上きゝとりてくれ〳〵、一度はよい二度はよい三度はよい、年の中とゆふある日もある、又なくばならん、みな〳〵のものたんせいをつく



し、年限をとほりたる、御地場といふはよふしやんしてみよ、それ〳〵の處にはなによの事もおさまりたる、さああちらからもよりくる、こちらからもよりくる、みなよりよふている中はじめといふものは鳥渡にはいくものやない、年限とゆふその中にめん〳〵もどふなろふやしらん、こふなろふやならん、これ一つ鳥渡のはなしのだいである。

さあ〳〵屋敷の中にすみかとゆふ、一つどふどふでもこふでもふせこんだ中はよほいやあろふまい、世界からあんな事じよふじや〳〵とゆふ、ながらく子親にかゝるとゆふ理きゝわけ、子にかゝれば親とゆふ、子のわづらひは親のわづらひ、親のわづらひは子のわづらひ、一つにはどふなろふやしらんとおもふが、めん〳〵おもふた處がなにもなりやせん、又みな〳〵の心

の中にもある、よい事はよけれど、なんの事じやいなあ、親に
かゝりたながらくの身のさわり、これわからんなんだなあと、
さわりとゆふものはじつくりしてある、かゝりかけたら一日の
日もやすまさん、これ年をかぞへてみよ、わかきものやあろふ
まい、かみの守護はなけにやはたらきはできやせん、なによの
こともをさまる、一時は親一時の理で日がてらしたる、此心な
くばならんがよふきゝわけ。

△押て三名の兄弟へも申まして

さあ〳〵人の事とおもふたら、人の事我事とおもふたら、わが
事よふきゝわけ、さあ〳〵一寸ごくろふやと禮もいふにわいわ
れんなあと、六ケ敷中の理はゆふにはいわれん、理をはこぶは
眞實これをきゝわけにやならん、これをきゝとりてくれにやな



らん。

△おして『親ありて子あり』と仰せ下さる事は、御
本席様の身上にかゝります處をあちこちとかゝり
ます處身上御助願ひます

さあ〳〵大事の處やで〳〵、よふきゝわけ〳〵、ながいあいだ
親さわり耳はきこゑんのぼせる、一日の日もこれでもはたらき
とゆふものはさしてある、よふきゝわけ、ばつたり床について
は今一時大事の處やで、せかいからあつき一つの處でたちきり
たる〳〵、あつき世界である、この道は三年五年のよふにもい
ふている、世界をおもふて見よ、此道はよほいならん處からつ
けたる道、これをうしなはぬよふ、他に一つの心をわづらはさ
ぬよふ、これ一つとりこんであんな事ではなあと、こんな事で

はなあ、遠く處百里二百里からよりよふたる中、兄弟とゆふ中、又々中にはねたみあひはどふもならん、そりやありやしよまい、どふあこまで心をあはせ、たのもしい道をつくりてくれ、あれでこそしんの道であると、せかいにうつさゝにやならん、これまあよくきゝとりて、皆々の心むねに手をおいてしやんをしてくれ、よふきゝわけてくれるよふ。

△明治三十五年九月八日北分教會役員兼船井支教會長樋口幾太郎身上御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、身上とゆふ一つこゝろゐんとゆふ理尋る、尋るからこれだん〳〵さとしおくよつて、一つ理きゝとりてくれ、さあ〳〵、これよふきゝわけてくれにやならん〳〵、此道とゆふはありがたいけつこふとゆふは一人のこゝろ、何年いぜん一つ年限、皆それ〳〵の心よりあつまりたる一つの理、これどふしよふこふしよふ一つのり、これ道とゆふはなんでもとおもふ精神からできるもの、それ〳〵心のはたらきせにやならん、それから心とゆふはたらくからだん〳〵、くに〳〵ところこれもんかたない處から一つの名稱とゆふ、これよほいでできるものやない、これ一つしつかりきゝとりて、一つ心おさめてくれ、身の處にまだ〳〵どふなろふかこふなろふかとおもふた日もあろふ、如何な事も一つふんどまりたる處、すつきりうけとりてある、又萬事の處はこぶよほいやない、そんなら〳〵せつなみとゆふ、どふゆふものやこのせつなみよふきゝわけ、人間あら〳〵とんとおもふ日もあろふ、此時身上これではなあとおもふ、そらおもふやない、道のこへはつくす一つの理がこ

ゑやで、はこぶ心はこへやで、さくもつもこゑなくばなろふまい、しやんしてくれ、皆々の中の理にねたみあひせねよふ、上にたてば下々の心をはこぶから神いさんでつれてとふる、しつかり〳〵とき、わけ〳〵、これこれまでとゆふものはどふこふしつかりふみとめ〳〵〳〵、身上の處もふみとめまだ〳〵さきのふかきたのしみがある。

さあ〳〵一日の日は將來の心、分教會分教會長といふやろふ、これ迄の處〳〵、本部一つのりみならへのりをわたすで〳〵。

△押て北分教會長の事仰被下ますか

さあ〳〵わかりた〳〵〳〵、心ゑみな〳〵それ〳〵手をつないでとふるなら、まだ〳〵さきはながいほどに〳〵、みなこのりたのしんでとふるよふ。

△明治三十五年十一月廿一日教會事情願濟後に御諭し

さあ〳〵一寸一とこと聞かしおこふ〳〵、さあ〳〵一寸ひとことあらためにやならん、さあ〳〵どふゆふ事といふ、たゞあらためる、これまでぜん〳〵よりはじまりとゆふ事上〳〵、わからんどふゆふ處、一日の日われも〳〵だん〳〵道とゆふさづけ一條、一つりあらため、これから一日の日といへばよふ〳〵三名、三名とおもふたぶん日々のこへとゆふ、だん〳〵さかんとゆふ、けふは何名〳〵何十名〳〵一つりである、だん〳〵のりあらため、日々のりあらため、よふ〳〵のりしつかりあらため、取次は三名、書取は一名なけにやならん、めん〳〵三名の中から三名のかり席一名、りをはづれるよふな事ではなんとおもふか、なんでも三名たちならんでわたさにやならん、われ

〳〵はそれ〳〵から三名とゆふり、どふゆふものこれより中に
それ〳〵中のり、一日の日はならん處なろふまい、これもなら
ん〳〵一つのりをあらため、一日〳〵三名とゆふ取次なんでも
かでも三名、たちならんでこれをくずしてくれてはかわる、お
もひ〳〵何席のなんでもあらため、三名やくあろふ、三名はた
らいてくれ、三名のりに一つ理はこぶ、これどふもならん、よ
く聞わけてくれ、又取次大事の處である、あとさきぬけてはわ
からん、それこれはどふとしんばしらしつかりいひつけ〳〵、
おもわくの理をもつて三名五名なあ、そのばのりはめん〳〵の
心にどふなるか、取次三名より取次ならん、なんでもかでもな
をも一つ理あらためてくれ、書取たれとゆふはしんばしらとゆ
ふ中にひかゑといふ、なんどもこれはどふもならん、ざんねん

のり身をくづしてくさらかしてしもふたこれ一つのりはとり
かやしはできん、けふ時のまにはあわん、あとゝゆふ、何ど
まひ〳〵この一つのりをあらため、何よのりけふからゆるす
〳〵、これどふせいこれこふせいしつかりさとしておけ。
さあ〳〵心一寸はなししたらりに、一つ心にはまらにやたづね
〳〵、尋ねるがよい、又一つ心おさまればそれでよい。

△明治三十五年十二月三日永尾芳枝八木支教會部内
飯倉出張所整理の爲出張の御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ〳〵尋る事上、さあ日々の處とほ
く處、あちらからもこちらからも心一つになによの事も理とゆ
ふ、時々一つ理とゆふ、さあ〳〵まあよくみなみな事情に一つ
理さとす、どふでもこふでもぜん〳〵道つたへ、心だけ事情よ

ほいやあろふまい、身上すみやかなればはこぶがよかろふ、それ〳〵からだん〳〵じうぶんならんから理とゆふもの男女にはよらん、さき〳〵とほくからみな〳〵のものもどふこふ心にふくんでやつてくれ、みな〳〵それ〳〵事上、身上さへすみやかなればゆくがよいゆきてやるがよい。

△明治三十五年十二月十七日教會事情濟後暫くして

さあ〳〵〳〵ひそかに一とことといひきかす〳〵、さあ〳〵これもふだん〳〵と身上事情といふ、一日の日けふの日またどふゆふ、だん〳〵どれから身上理さわり、尋るからさしづあろふ、どふも一つりわからん、十分〳〵事情さあいかなるとおもふ、席事情一つ事情さとしおくからしつかり筆にとれ、だん〳〵事情いかなる事情かさなり、かさなり〳〵理一つせまり、いかなる事とゆふ、ふしぎどんな事もこんな事もなるならん、ならん〳〵聞わけ〳〵てくれ、一つ理さあきゝわけにやならん、日々第一理身上事情はこばにやならん、事情一つ理きゝわけ、一日二日四日五日十日、半月三十日もふこれならんといかなる事情、よく一年の中にてもよくたびの中にてもよふ一つ第一理あろふ、よふきゝわけ、どんな事もこんな事も日々にてりわたる、理にくもりをかけるで、日々日てる、てらんの理きゝとれ、さあ〳〵もふこれ身上さわり、一つ日々さわりであろふ、第一くもりからみにくもりかけて、みがくことせずして、日々くもりきゝわけ、わからぬがなんともいはれぬりがくるで。さあ〳〵さしづまる日まで日くらし、道とゆふ道のかゝわる〳〵、日なくばなんとするか。

さあどふなあ、これどふなあとゆふても、こふなつたら身上どふこふとふするか、日々の日心にかゝればこそかならずや、おもふ中の道理十分でかゝらにやなろふまい。

さあ〳〵もちいるか、もちいらんかことばもちいらんさしづはいらんもの、のちのさしづもせんとゆふたる日あろふ、さあ〳〵どふこふほどのふやすみ日とゆふてある、やすみ日いつか〳〵とゆびをがぞへて、世界のたのしんでいるもの、なんにんもあろふ、いつかあるとゆふ中にやすまんならん日がついたら。ならんとゆふかどふゆふか、さあ〳〵一つさわりや、あらため集會や、あらためどふ日々よい〳〵とゆへど、中に一つ事情とゆふ、たてゝたゝにやゆくたびかさなるから、これがたびかさなるから日々のはたらきはできにくなるとゆふ。

おさしづ（明治三十五年）終

明治三十六年

# おさしづ

（明治三十六年）

△明治三十六年二月廿五日豊田山御墓所の道路石段
今般御本席様より御寄進被下に付心得迄御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、さあ〳〵こふといへばこふとせにやならんと、心までにまかせおくによつて、こゝろおきなくゆるしをくによつて、なんどきなりとかゝるがよひ〳〵。

△明治三十六年三月廿一日御本席様身上昨年秋の大祭前日頃より御身上御障りあり其節教長様へ御願申し甘露台へ御願かけば速かと御成被下候に付、御差圖を仰度と御本席様へ申上ば多くの信徒の運

び濟みし上と仰せ被下其まゝに相成又四五日以前
より御障りに付一同御願

さあ〳〵尋る處〳〵、尋ねにやなろふまい、又一日の日なんでもどふでも尋ねにやならん、尋ぬるから一とことの理さとさにやならん、どふゆふ事さとすなら、ぜん〳〵よりつたへたる情にながれなよ〳〵、情に流れてはならんと前々よりたび〳〵さとしたる、如何な事もきゝわけて、日々わるい事くださん、わるい事さとしてないなによの事きゝわけてくれ、これまでどふしてなりとこふしてなりと、どふゆふ事も運び、こふゆふ事も運び、中にこふゆふものいれてはならんと、いれてはいかんと、皆々のものおもふ情にながれなよ〳〵よ、たび〳〵さとす、さとしたる中に世上の理にながれる、いかな事もよふきゝ



わけて又候みな〳〵の處あらため、よくとりなほしてあらためてくれ〳〵、あらためついたら日々の理である、これ第一あらためる心ないかよ〳〵殘念な事やわいなあ〳〵。

さあ〳〵もふこふして、どふしてとづゝない道は通りにくい、しんどい道はとほりにくひと、らくな道はとほりよい、情に流れるはとほりよい、言葉くだすはよほいやない、此道は席の言葉くだすとおもふな、天よりさとすさあさあ心一つ理にとりなほして、眞の心にこふゆふ事どふゆふ事と心に結びこんでくれ、一日の日の心に一つ理定めてくれいかな事もあらためてくれ。

さあ〳〵これ〳〵よふきゝわけ、くどふ〳〵はなしつたへたる、智者や學者でできた道やない、情にながれ〳〵、さあ〳〵

らく〳〵定約むすんで、あれ見よもうかい〳〵、なつてもよしならひでもよし、一つ心もんかたない處からできた道、よく心むすんでならん時にはどふせにやならんとゆふやない、そう心にある、これきゝわけ、どれだけのきかひある、きかひありても人なかつたら、きかひうごかぬ、これ心にもつてくれ、よふきゝわけ、どこにどふゆふそゝふありた、こふいふそゝふありたて、元からどふゆふ事もあらためてくればよい、事にとりた限りとゆふはそれじまひのものである。

さあ〳〵しつかり日々の處に運んでいる、内に聲とまり一日の勤めもできん、なれど神がつかへばどふいふ言葉もくだす、どふゆふ聲もたすでこの事きゝわけ。

さあ〳〵よふしやんして、こふしてあれど心のうち多く兄弟多分兄弟できてある、その兄弟しつかり心あはせ、心とりかへてこふゆふ事あらためたと、なれど眞はこふゆふ事であるほどに、これから定めて、皆々の處へだんじてとりきまりてくれにやならん。

さあ〳〵だん〳〵はなしつたへた理にあたはにや答へするがよい、こたへすればどんな事もはなす、みな〳〵の中にこふと一人でもあれば、理として尋るがよい、ほんにそふであるといへば、みなの中へつたへて、まんぞくあたへるは一日の日である。

△押て獨立の上教會信徒の數に對し其他教資金の事
に付相談の上取極致しましたが其事御報せ被下事

であります　かと御願

さあ〳〵心得ぬ事あれば尋ね、尋ねたら又一つ理さとす、これは世上の大ぼふとゆふ、大ぼふといへば大ぼふとゆふなれど、筆にとりたかぎりは大ぼふとはいへん、みなそれ〳〵あちらから、ねたみあひこちらからねたみあひ、ねたまれるはかたきとゆふ、はんたいとゆふ、筆にとりたら大ぼふとはいへん、大ぼふといふは心にある、なんぼふかぼふとはいへん、元々の理は心しだいとゆふ、大ばふとゆふも筆にとりたかぎりには、これよりかたひものはない、これはんたいにとりては大ほふの理にやならん、みなみなこれまで眞實の心にくもりあるかないか、せつかくの道どこにあるか、よくきゝとりてみよ、これからしやんをしてみりやどんな事もわかるやろふ。



さあ〳〵そふしてみなだんじよふて、心でとりけしてしまわにやならんで、心にとりけしてしまへ。

さあ〳〵早く〳〵一日も早く、一時も早く席もつとめさゝにやならん、道の理とゆふは、遠く處からいとはずでゝくるどふゆふ處からでゝくるか、一つ理どふゆふ事運ぶか。

さあ〳〵けふから席運ばすがつかれているから處分の事はいこふまい、ぼつ〳〵きれんよふに運ばす。

△明治三十六年三月卅日南海分教會部内中野支教會
長西松太郎妻うの卅七才身の上御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、さあ身上とゆふ一つ理尋ぬる、ながらへて〳〵身上にこゝろへぬ、尋る事上なんぼふ、どふはなしきけど身上こゝろへぬ、どふゆふ事であろふ、日々心の理、さあ

〳〵尋る事上よぎなく事上尋る、尋るから又一つ順序の道さとしおこふ、よくきゝわけにやならんで、さあめん〳〵もしやんをしてみよ、なんぎさそふふじゆさそふとゆふ親はない、さあよくきゝわけ、たすけたいとおもふ中に、身上さあなあ日々の理たすからにやならんとおもふ、又中に深き理さとしおこふ、さあこの道とゆふは年限の道である、よくきゝとれ、一日の日もしやんにしやんをすればどふなろふやしらん、こふなろふやしらんとゆふ心ありた、さあどふとゆふ、日々これからとゆふ、なんであろふ、身上のせまる一時の處よく聞わけ、なつてもならいでも、さあ人間とゆふものは生れかわりの理がある、よきたねまいたらよきみがのる、この一つりよくきゝわけ、こんな事とさらにおもふやない、なつてもならいでもとこのりきゝわけ、こすにこせんのがるにのがれん、一代とゆふたら心ぼそい、世上にはこれだけの道をとふりてあれどもなあとゆふ、こゝろをさめ一つよく定めてくれるよふ。

△明治三十六年五月廿日御本席様の居宅の東南屋敷
續き先達て買上被下候地所本日より石垣築度御願

さあ〳〵尋る處〳〵、尋る處の事情はゆるしをこふ〳〵、ざつとして〳〵、じふよふゆるしおこふ〳〵、これ一寸一とこと何かとさとす、しつかりきゝわけ、筆に一點うつてしるしかけ、まいよ〳〵はなし、さあ〳〵ほのかにもきいてるやろ、又ほのかの事情、ぜん〳〵にもさとしてある、一日や二日や三日の事情どふなる〳〵、これ四五日とゆふてあろふ〳〵、何かの事もよくきゝわけ、どんなふじゆふ何かのりも何かの事もいづむよ

ふのこゝろ、これまでの處かんなん日々の處で何かの事むつかしい、世界の順序とゆふ道である、さあこれからのりとゆふものはほそきこゝろにみな〳〵ほそきこゝろの道になる、あゝどふもならん、廣ひ順序一つ一日の處に心やんで道とはゆへよふまい、だん〳〵のつぎめもかけ、ほそくなりたらどふするか、こんどふそくなるまでの處、はた〳〵もなかなかよふいの事ではないで、つぎもわからずぬふ〳〵とゆはば、何もゆふ事はない、どふゆふ處にこれよりくゝりつけるか、これよふきゝわけ、何にもかも何よの事もとりむすび〳〵、日々におもふ心はみなちがふ〳〵、なれどみな〳〵そふゆふ心のものばかりでもないが、よぎなく世界順序の情にながれ〳〵てしまふからどふもならん、だれにもわかるかなゝ理でさとしおこふ、なんぼ田



地田畑あればとて、まかん種ははゑん、種なしにつくれるか、種まかずにとれよふまい、すみからすみまでまきおろすでみがのる、一りゆまんばいにかへす、この理きゝわけ、時々だんだん〳〵世界もさびしかろふ、道さびしかろふ、一つこゝろをさだめ、こゝろ一つ道はやくにたのむ、いそくおく。

△おして明日は先生方も多分かいられますから談じましてと申上候おりから

さあ〳〵もふほどのふかへる、とほく處はなろふまい、なんにんよりてもそも〳〵ではならん、かへるまで十人あるなら三人でもよいと、みちにかなへば十人ともよいとゆふはどふりである、理にかなわんよふの事はなんにんいてもおなじ事、これくどふ〳〵の理にさとしおこふ。

△明治三十六年五月廿三日常の事情願濟後の御指圖

さあ〳〵一とこと〳〵〳〵、さあ〳〵一とこと一寸はなしかける、ぜんもつて一とこと、一時事情いかなる事どんな事も、さあ一つきゝいれにやならん、もふこれ順序どふゆふ事きゝわけにやわからん、あれみよとふく處はるばる道はこぶひとりやあろふまい、もちいるかもちいらぬか、なにがためのりにとるか、よふきゝわけてくれ、さあ〳〵まあ〳〵はなしとゆふ、だん〳〵事情これさとすれどなあ、さあすつかりとりかへ〳〵、もと〳〵の處みちの道理であろふ、さあ〳〵こゝろにさだめてくれ〳〵、ところ〴〵名稱名をおろし、だん〳〵の道もつたへたる、皆〳〵こふ事上此理をきゝわけてくれにやならん、さあさあ事上一つ、これいかなる事もだん〳〵とさとしおいたる、一つきゝとりてころりと一つ理はやくさだめて、順序の理とりかへ〳〵、いさむ心とゆふは道である、そこではやくみな〳〵心を合せ、滿足あたへにやならん、あきらかすみやかと一つの道にいそぐとゆふ。

△明治三十六年五月廿九日天理教別派獨立請願書以前内務省へ提出致しましたが、宗教局では不完全なる故今少し完全なるもの差出せとの事に付、今回教典を第十章に製し更に出しましたら、是は完全なるもの故直に實行可然との事に付御許し御願

さあ〳〵〳〵尋る、だん〳〵〳〵尋る處〳〵、もふこれまでにだん〳〵いろ〳〵の事して、どふしてどふなりとこふなりとして、みなやる事まあ〳〵鳥渡の事情はよほどの事情おほき事であろ

ふ、又このさひ一日の日とゆふ、一日の日とゆふはこれまでほのかの理にさとしたる、一日の日があるとさとしたる、心にあんじて心しづむてしまふてはならん、心一つ元とゆふ臺とゆふ、どふでもこふでも立きるとゆふは、もふかなわんかひなあと、すみからすみまでなみだをながし、なみだをながすは一日の日といふたる、こふもふだすものはだすがよい、もふみな〳〵こゝろとゆふ心を一手に定めるなら、これ天から順序の道をあきらかさだめる日ある、あんじる事いらんほどに〳〵、どふでもこふでも一日の日ある、よほど事上やむであらふ、こんな事もふとうげとゆふ日なくばならん、そこでどふでもかゝるとうげとゆふ、さあ〳〵いさんでくれ〳〵、はじまりた〳〵〳〵いさめ〳〵、理とゆふものありやせん〳〵、なにもありや



せん、一日の日がくらくなりてからどふなるか、一つさあ〳〵はじまりた〳〵、心をどんといさんでくれ〳〵。

△教典提出致ますと申上

さあ〳〵だすものはだしたがよい〳〵、まあ〳〵だしたからとて〳〵何にもわからんものばかりや、こんな處にこれだけの事ありたかと、これだけの事よふくひしばりたなあといふ日があるほどに。

△大斗之地命を大日嬰命に改稱御願

さあ〳〵今の處、まあこれ鳥渡道理よりさとせば黒札同樣、黒札とゆふよふなもの、何もいふ事ない、あかるい日がある、心だけ充分はかりてみよ、その上一つ天の理より外はありやせん。

△それではそふゆふ事にさして頂きますと申上

さあ〳〵どふなりとして一つみるがよい、何か一つ心とゆふはなくばならん、みな〳〵わからんものばかりや、みな〳〵わからんものばかりよりている〳〵。

さあ〳〵今の處はみな〳〵心よほどするゑておかにやならん、やれこれが道かひなあとゆふ、そのかはり末代の日も同じ心を定めてくれにやならん、みな〳〵心一つになしてくれにやならん、内らはなほも心を定め、みな〳〵國々他にはゆふ迄同じ心、一つうちらにどふこふありてはならん、道にくもりありては助ける事できん、どんな事もこんな事もみなそれ〳〵の心の一つ理に治めてくれにやならん。

△衆議院請願委員の方へ天理教禁止解散請願書廻來り、仍て奈良縣代議士木本、平井の兩氏より昨夜

○時十分に『テンリケフクワイキンシカイサンケンポタイニジフハチテフニヨリシユウギキンヘモチダシヨツテサンコウシヨルイモチテマツムラスグノボセキモトヒライ』右に付御願

さあ〳〵まあいろ〳〵のはなし、元がわからんから元をあらはする、元あらはせばみな〳〵これまでかんなんした理といふ、一つ心を持てくれにやならん、子供の成人まつていたほどに、よく〳〵ぜん〳〵よりもさとしたる、さあ〳〵すぐ〳〵いてくるがよい、どんな事もはなししてくるがよい、かくしつゝみはすつきりいらんで〳〵。

△明治三十六年六月十三日本部西の方え足達の屋敷へ假の板圍を造り、境堺へ一つ石塀へ元稻田忠七の屋敷跡西側へ石垣塀築き川筋の石垣を直し土管入れる事の御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、さあ尋ねる事上はみな〳〵それ〳〵、まあこれだけひろがつたらこふとゆふ、まだ〳〵のりはあるのやで、さあそこでおい〳〵とせくことといらん、ねん〳〵とし〳〵、てんぜんに大きなりたものはいつになりてもうごかんで、むりをしてねんげんのこんのにすればついにはなれてしまふ、そこでまあ〳〵しんのこゝろはまあ〳〵をい〳〵、そこでいそぐ事いらん、これだけこふ〳〵とおもふなれど、せくことは一つもいらん、これだけおよんでこふと、みな〳〵のこゝろにおもふ、またこゝまでこふしてきたのに、こふゆふことどふゆふことであらふとおもふがりなれどもおもふことはないどふでもこふでもおよぼすで、道もおほきくなり、こゝろもおほきくなり、世界のこゝろが大きなりて、これはどふしてもこふしてもたてにやならんと、くわんねんは世界にさすで、さあ〳〵いま尋ねる事はそこはどふなりとそこゑまかせおく。

△尙元城作次氏屋敷東へ塀を築く御願

さあ〳〵かこひ〳〵、かこひはせんならん、何時なりとかゝるがよいゆるしおこふ〳〵。

△明治三十六年六月廿七日永尾芳枝昨日朝より腹痛致し、一時御助け頂き候處昨夜二時頃再びいたみ今朝に至り漸く治り候如何なる處御報せにあづか

り度御願

さあ〳〵〳〵尋る處〳〵、身上一つさあいかなる事とおもふ、どふゆふ事とおもふ、尋るから一つさしづとゆふ、又一つ心身上に一つ理、どふゆふさわりとゆふ、これまでにないさわり、これ順序の理一つさとしおこふ、身上の處みなそれ〴〵とゆふ、どふしてこふして身上すみやかならねばどうする事もできよふまい、そこで心とゆふ道とゆふりとゆふ、日々それ〳〵なにごとも中とゆふ理、そこで心とゆふ理すまし、身上一寸すましてさしづ、まいよ〳〵これまで又それ〴〵の心にきゝてもいるやらふ、筆にもとりてある、みてきゝわけあざやか運べた事もある、まだあざやかならん事上もある、これまたなにかの處もさとしおく、これ世界の理みればなにからなによの事もあ



る、よくきゝわけ、此中とゆふ理とりよふありてとりよふちごふからどふもならん、さしづもとりよふでよふでよふきゝわけ、あれさしづとゆふ理どこから出るとおもふか、だれがするとおもふか、よふ〳〵の理のこしおいたる、日々順序の道とゆふ、せかいとゆふ此事上からみな〳〵それ〳〵の處よせてくれにやならん、此一つのりよくきゝわけてくれにやならん、身上の處あんじる事もない、又々一つなによの處も筆にとりてきゝとるからさしづとゆふ、どふゆふこふゆふありた、又々理尋るから一つ心もあんしんさゝにやならん。

さあ此の道とゆふ、心のはたらきといふ、身上あんじる事いらん〳〵。

△明治三十六年九月十八日日本橋分教會より會長の
家内死亡後役員の治め方且前會長十年祭執行に付
増野正兵衛出張の心得の爲御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、とほく年限いく年むつかしい、さあ〳〵ぜん〳〵はよほど道をつくし、よふはたらいたものである、それ〳〵心をうつしてのはなしはよふこれふでにくわしくかきとりてくれにやならん、なかと〳〵まち〳〵ではなかの道一つ理なげく處、理よふ〳〵道もたつたつの中一つ理、これもこふしてどふして道のよふ〳〵はこぶ理を聞わけてくれ〳〵、どふも一時の處事情どふこふかたより〳〵、日々の處なげかわし〳〵〳〵〳〵、さあ〳〵十年いらいあとかたのない處きゝわけ、道とゆふ一つ理心のたつた、さあ〳〵十年いらいきゝわけてくれ〳〵、なによの事もうちよつて一つ人とゆふかわりとゆふ、さあ〳〵これとそれとやれ〳〵このものや、もふ事上一つ理によつてゆかにやならん、これみなみな心をさつしてくれ〳〵、さあ一時の處どふやろこふやろふ、みな〳〵の心もあろふ、さあ〳〵たつてしもふてすぎてからどふもならん、道とゆふ理とゆふなげくもきゝわけ〳〵。

さあ〳〵これさきとおもふはながひもの、一つむつかしい、あと〳〵一つ事情、それ〳〵道とゆふものはなくばならん、心とゆふりとゆふ、これやどれや一つどふでも一粒萬倍の理さとしおこふ、さあ道とゆふ道とゆふものはむつかしいよふでなんでもない、これをもふてこんなんの場所をもとほる、きゝわけ、理の道さあ〳〵道とゆふ理定め、ほんにそふでなけにやならん

とゆふは、道のこゝろであろふ、なによの事もおさめてくれ〳〵、これもとだいにある、ところ〳〵國々それ〳〵こんとゆふ、これよくきゝわけてくれにやならん、また治まらにやならん、道の理この理おさめどふでもはこんで、事情萬事の理に治め、萬事の處〳〵にかたどり、なによの事どふであろふこふであろふと、古きものしらべてこふとするは天の理の道であろふ、さあ〳〵萬事のふつごふの中なきよふ〳〵、それそれはこんでこふと、あと〳〵おさめにやならん、時の理ほどあつい理におもふ萬事の處しん實のこゝろをおさめてやつてくれにやならん。

△押て第二勘藏の處御おさめ被下ます御願

さあ〳〵はなしの理とゆふ、もふ一つわからん〳〵、よふきゝわけ〳〵、あと〳〵すぎたものはこれはぜひもなし〳〵、なれどすぎたものゝこゝろをさしいつてくれにやならん、中にそれこれ中になんにんある、さき〳〵のその精神のこゝろを見定めて、これとゆふて治めてかゝらにやならん、一たんこふしたどふしたいふ理をたてたぶにやをさまりやせん〳〵、ふるき中に道の古きものある、そのもの心をよせてはこべばむつかしいものもおさまるものや〳〵。

△明治三十六年九月廿六日村田豊吉卅三歳大縣部内澤の井平二郎妹りと廿歳緣談御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、ゑんだん一つ一條さあ〳〵事上こふとゆふ、どふとゆふ心々さへたかい〳〵の心親々心事情時々心理とゆふ、さあ〳〵そのまゝ〳〵、すぐとはこんでやるがよい

〳〵。

△明治三十六年十月廿日島ヶ原分教會長擔任撰定の
御願

さあ〳〵だん〳〵尋る事情〳〵、尋る子供はこれだん〳〵みな〳〵こゝろからとりては一つ理、よぎなくであろふ、また一つだん〳〵それ〳〵中とゆふ理、これまで數年來の事情どふもならん事情でありた、さあ一日おくりまたおくり、をくり〳〵日をおくりてきた日、なあなんたる事であるとゆふ、こゝろはやま〳〵のりであろふ、たゞられん事情であろふ、そこでみな〳〵精神どふしてこふしてとおもゑども、ひとまづの處わくらやみどふよふであつた、ひとりの心すまんあゝなんたる事となあ、なれどこれよりあきらかな道をつけて、それ〴〵たのもし〳〵とゆふ、一つ精神を定て、もふ此道何年たちてもこれまんごふまつ代の理をつくりとるも精神一つのみちである、ふるき事情にしらしてある、願ふ處の理はしばらくしばらく、それ〳〵の處じゆんじよふの理よふき、わけ、一つ〳〵しつかりとあらため事情一つ理、一つこゝろなによの事もよふきゝわけ、一つりありたさあすつきり一つあらためて、こふといへばさあ、神の日々守護とゆふ、あんじる事いらん、精神一つの道がつくほどにしつかりとたのしんで〳〵。

△明治卅六年十一月三日（舊九月十四日）梅谷四郎
兵衛五十七歳身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ身上事上こゝろゑんいかなる事であろふ、さあ〳〵それ〴〵内々他もそれ〴〵どふゆふ事であろ

ふ、おもふ處身上事情こんな事どふゆふものであろふ、いつ〳〵一つ事情身上にかゝる處いかなる事どふゆふ事おもふ處〳〵、よく一つ事情きゝわけ、年來の理おもひいかなる理おもふ、いんねん一つ年限年來〳〵心一つ一時心、事情一つよくしやんをしてみよ、一時身上がせまる、どふもならんこふもならん、身上事情これそれ他にどふゆふ處もみな〳〵ある、そこで見てどふ聞てどふ、一つ聞分一つとりなをしなにがちがふかがちがふかちがはぬが一つ、さあ萬事の處理一つそれぞれ同じ理である、さあよくきゝわけ、身上からせまればどんな事もこんな事もおもひだし、こふゆふさしづあれば一つとりなをし、一つよく聞分、年來の理をきゝわけ、一つ理心におさまればあんじる事いらん、あんじたぶにやならん、身上さああんじる事いらんで、さあなにかの事もまだ〳〵とゆふ、何がどふこれがどふ樂は十分のこゝろにおさめ、そこでよふきゝわけ、他に事情おもふ身上はあんじる事いらんで、あんじたぶにやならんで。

△明治三十六年十二月廿二日諸井國三郎六十四歳身上御願

さあ〳〵尋る〳〵〳〵、尋る事情〳〵、さあ〳〵どふなりてこふなりてどふもならん〳〵、ならんから一つ尋る、尋るから又一つ事情りさとする、いかなる事もきゝわけくれにやわかりがたないで、身上に一つ事情心におもふ、心一つ事情なによの事も身上にかゝりてからどふもならん、たゆるにたゑられん身上のくるしみ、一つの理の苦みなあ、心にかゝりてなによの事おもふ事情、よくきゝわけ、年限これ一つ〳〵ゆびをりかぞへ

て、一つ心をやすめてくれにやならん、ねん〳〵年限〳〵道筋〳〵、身上一つ十分のり、そこで一つをもひ〳〵の日をとほる、多くの中に事情一つどふもならん、そこで理又一つ又さのみをもふた、これ事情理道すじの理である、なつてもならひでもなによの事もどふゆふ理、このこゝろのをさめたる、そこでしばらくおもふ中に、又ころりとまちがふ、これどふもならん、さあ〳〵國始め一つ道の理のたいをさとしおこふ、この道の中はこふなつてもどふなつてもこれ三歳のこどもとゆふ、心になつてくれにやならん、此理一日の中に事情早く事情さとしてやつてくれ、さあ又たのしみなくてとふれるものやない、さあくるしみもしばらくとゆふ、そこでよふきゝわけ、ことしにでけねば來年、來年で出來ねば又來年、ねん〳〵かさなりたらたのしみとゆふ、年がかさなるほどたのしみ、此理をよくきゝわけ、此理早々つたへてくれ、一時身上たいそふとゆふさあこゝろ道とゆふこれたのしみとゆふ、たのしみ〳〵の道を造りあげた道、いつになりてもまんごふまつ代とゆふ、一つ心一人の名は消やせんと、みな〳〵心にも同じ事、理一つさとしおいたるよくきゝわけ、さあ〳〵身の處早く一つ、さあやすませ〳〵、どふなつてもこふなつても、なるもいんねん、ならんもいんねんならぜひはないとゆゑばどふむならん、身上あんじる事はいろふまい〳〵。

△押て諸井氏の娘縁談の事でも御しらせ被下ますか願

さあ〳〵なによの事も一時身上とゆふ、ひるもよるもわかりがたないで、どふするかどふもならん、そりやはた〳〵の心にお

さめてくれにやならん、これたのしみとゆふ心をもつてくれ、さきをあんじる事はいらん、あんじたぶにやならん、さあ身上どふこふ身の處かゝりてそこらの内もたづねて、みな〳〵心とゆふ、どふこふ内もある、此中にもある、さあこの理よふきゝわけてくれ、神の子供にふじゆさそふなんぎさそふとゆふ親はあるか、此理よくきゝわけ、何よのこともあらためてくれにやならん。

△明治三十六年十二月廿四日本部の屋敷土持御許の御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ〳〵やしきの土持ほうとはじめかけ、初めかけたらどふゆふ事情見へるともわからん、みな〳〵のこゝろもあつまりてみればまた一つ事情、いつからこふどふ事情、さあ〳〵いつなりとはじめるがよい〳〵、さあ〳〵事情こゝろとゆふ、せかいからこふとゆふなくばならん、心のよふ一日の日も千日にむこふとゆふ事まだあるかいなあと、世界に一つ理を定めさゝにやならん。

おさしづ（明治三十六年）終

明治三十七年

# おさしづ

（明治三十七年）

〈明治卅七年二月六日寄附者に對し本部より與へて居りますのは、是迄瀬戸物の盃でありましたが、是をぬりものゝ盃にさして頂き度御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、何か萬事事情は尋ねにやわからん、尋るからは一つ〳〵のさしづにおよぶ、尋る處は今迄の處ところりとかへるがよかろ、そこでぬりものとゆふやきものゝ盃だけではならん、どふして一つのもの二つ三つになるともわからん、そこですつきりぬりものにしてやるがよい、みなこゝろだけ一つ〳〵はからにやならん、すつきりぬりものにしてやるが

よい。

△押て大き處は銀盃にさして貰ひましたら如何で御座りますかと御願

それは心だけしてやらにやならん、それは一人やない、一人からどこまでもみなこゝろある、どふせにやいかんこふせにやいかんとはゆわん、みなとふく處から、いとわずしてくる、心だけうけとつて十分滿足あたへてやらにやならん、まんぞくすれば一所やない世界にうつる、ふそくでいく〳〵すればりがきへてしまう、どこ迄もみな〳〵まんぞくあつまつて道とゆふ、これだけ一寸はなししてをこふ、まんぞく十分さしてやつてくれにやならん、まんぞくのりからめがふくで、これをよくきゝわけてくれ。



△明治卅七年二月廿五日此度神道本局より天理教會に對し内務省よりの達には教會長是非上京せよとの事に付明日より上京被下事御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、さあもふだん〳〵ながらへて席やすんでいる、もふこれ一日の日がないよふになりたる、席も一日事情といふ、尋る事上はいろ〳〵あるやろふ、どんな事も尋る事あるやろふ、今一時尋る事上のさしづ、こんど一つのほる〳〵とゆふ、いかな事上どふゆふ事上、どんな事上でもおめおそれは一つもすりやない、時とゆふしゆんとゆふ、一つ理をきゝわけ、ながらへ〳〵年來にしらしてある、筆先にしらしてもある、もふおちはない、みなすみやかさとしてある、どふゆふ事上こふゆふ事上始めかけたら、おほきい事上、大きい事上治る

事上どこにあるよふきゝわけて、みな〳〵こゝろにおさめ、このたび世界も一つ、地塲も一つ、大そふ〳〵大そふの事件あるとゆふたる、この日もあらふ、ゆふたゞけではわすれる、筆先にくわしくみなしらしてある、うそは一つもない、もふ日がちかずけば〳〵、もふ日がきたるとゆふ、もふ一つ大變、そこで精神一つ理をもたす、こわき處もなくばならん、こわき處でもをそれはない、なんでもない所はこわい、大き處ほどこわくない、親にもたれつけ〳〵、これほど丈夫あらふまい、どんな事もしらしてあれど、あちらへなほしこちらへなほし、けふのさしづは年來に一つ積り〳〵たさしづである、あすからとゆふ處はおめおそれはするやない、こゝろおきのふいてくるがよい、親がつれてゆくどんな事もこんな事もうん〳〵とゆふてこい。

△隨行として島村菊太郎儀御願

さあ〳〵一人でいかんついていかにやならん〳〵。

△明治卅七年三月二日泉支敎會役員茶谷佐平妻さだ

四十八歳身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ身上一條いかなる事情であろふと一つ尋ねにやならんから尋る、尋るからは又一つ順序のりをさとしおく、よくきゝわけにやわかりがたないで、身上ふそくなればいかな心もわくであろ、これこゝろにかゝるやろふ、これだけこふしている、どふしているのにとをもう、いかな事もきゝわけにやならん、なんぎさそふふじゆさそふとゆふ親あるかないかきゝわけ、こゝ一つしやんして心にためなをすがよい、

これまでつくした理、はこんだりはみなうけとつてある、そんならどふと又おもふ、たすけにやならん、たすからにやならんが一つり、この一つ中に身上なかべとゆへば、いかな心もわくであろふ、どふゆふ心もわくであろ、なれどよふきゝわけ、人間は一代一代とをもへばなんでもないなれど、つくした理はたらいた理は、しよふらい末代の理である、この道と世界さきゝりと、りとりをきゝわけ、みちに一つ〳〵さとす、かりものきゝわけ、かりものとゆふ處から、一心定めてみよ、そんなら身上どふとゆふ、一時ではないなれどたいそふなつてもならいでもとゆふ、一つ心にをさめ、日々とふるつくす一時の心はみなうけとつてあるほどに、どんなりもみなうけとつてあるほどに。



△明治卅七年三月廿六日山本利八八十六歳身上御願

さあ〳〵〳〵尋る事情〳〵、さあ身上とゆふ、一つ事情ならん事情尋る、尋るから一つさしづしておくによつて、一つ十分さとしてくれにやならん、さあ〳〵年限ながらゑてとゆふ、ほのかのり、一つほそ〳〵のみちとゆふ、年限かぞへてみよ、よほどの年限とゆふ、さあ〳〵一つだいとさしづにをよんだる、親といふは一人であろふ、尋ねるから一つ心をやすめて、一つ事情こふといふは一時とゆふ、まんぞく一つのこゝろにあたへてやつてくれにやならん、さあ〳〵よるひるのこゝろをそへてくれ〳〵、すればめん〳〵のためとなるとさしづにをよぶ、さあ一つ一時どふこふない、ながらゑ〳〵、ながらゑての年限よほどの年限なれど、もふ年とゆふ、ならんとゆふ、どふこふなつ

たらみな〳〵のこゝろに運でやつてくれ〳〵、ならん〳〵の處からどふゆふ事もとふりきたる、十分にまんぞくをあたゑてやつてくれ〳〵、滿足が第一、一時どふとはない、にち〳〵の日がやすむとゆふ、心をはこんでやつてくれ、すれば身上もやすむとゆふ、これだけのさしづをしておこふ。

△明治卅七年三月廿九日教會長上京の時內務省宗教局長より金米糖御供の事に付種々咄しの結果洗米と改め下附する事一同協議の上御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、尋る事情よぎなくであろふ〳〵、さあこれ一つしつかりしたはなししてきかす、みな〳〵しつかりむねにしまりてくれ、よふきゝわけ、これまでいかな事もどふゆふ事もいろ〳〵の道とほりきたる、とほりきたる中に、もふどふなろとおもふた日もどんな事もあらふ、よふきゝわけ、いかな事もなにいふもかいふも、じつとしていたぶにやわからん〳〵、よびにくるでゝくる、でゝこひゆく、でゝくる、これはみな神がしている、これをよふ心得にやならん、道とゆふ道あればこそとゆふ、中にいろ〳〵の道、ひとつ〳〵事情にて一般みな〳〵ひらけてある、かひもくかふのふのないものなら、ひらけやせん、天の理であればこそこゝ迄一寸つけかけてある、萬國一體世界一體、いづれ開てみせるが、風のたよりでたよりない、それはそれだけのちからしかない、どふなりてもそれだけ力ある、神の力はよふいやない、どうなつとするで、そこでどふしたらよかろふ、こふしたらよかろとおもふやろふ、皆精神一つの力まるめてくれ、皆まるめる理が日々世上へうつして

ある、みなそろふてどふといふやどふもするで、中にいるだけではいかん、不足と〳〵ではまるまつたとはいはむ、ふそくのないのがまむ〳〵の理であらふ、みなるほどゝ心におさまれば、それは道であろふ、なにかそも〳〵ではいかん〳〵、どふなろふとも、なる道である〳〵、むねのうちにつゝむ事いらん、精神心のむすんだ理だけしつかりと。

△押て洗米にかえさして頂きますと御願

さあ〳〵とほりよい道はとほりよい、とほりにくい道はとほりにくい、とほりにくひ道ある、これだけ順序の道にさとしおこふ、情にながれなよといふた日あろふ、情にながれてしまふてからどふもならん、けふまでいろ〳〵の理をこしらへ、それではならん、皆心ひとつならなにもいふ事はないなれど、心とゆふ、二つ三つさんらんの心ありてはどふもならん、たよりない、ながらへてむねのうちたゞ一つの心で、けふの道くどきばなし、一言なげきばなし、一言いふておかにやならん、とほりよい道はとほりよい、とほりにくい道はとほりにくい、細道は通りよいおほくわん道はとほりにくいとゆふてある、まあどふせ一日の日があると前々さとしてある、なんでもかでも一日の日があるほどに。

△再び押て一同相談の上御願ひ申上ますと御願

さあ〳〵みな〳〵よりあふた中とゆふはよい事もひとつ、しやんもひとつこれ、第一よく心得てくれにやならん、皆々はなした理はだれにうらみもあらふまい、一つ事情また〳〵の理、どちら一つ理あはせよふにもたれにゐんりよふきがねはない、道

どこにもさわりはない、世界おぼうおよんで、あちらへこちらへ、なか〳〵この全國とゆふ處へ一つ理うつすはなか〳〵やういの理でない、よふきゝわけ、これが一つしやうこふ、これが一つたより治め、どんな日もある、なんぎふじゆ日もある、またたのもしい日がある〳〵、ばつたりと心に煩らはんよふ、これだけしつかり心に定めてくれにやならん。

△御本席様身上左耳難聞と仰せられるに付御願

さあ〳〵尋る〳〵、席順序の理を尋る、一日の處さあ〳〵どこがどふでも、いかな事上でもこふとゆふやとほりたる、けふはどふもならんとゆふはたまさかの事である、此道理みなの處へさとしおかにやならん、筆がいくらなん十になる、世界なみでも一日の日もきげんよふあそんでとほるが世界の道であらふ、けふもきげんよかつたなあと、よふあそんでくれたなあといふは、親こうこふとゆふ、また一つ理とゆふ、ふかきの理、一日の日もやすんだらみなあちらながめこちらながめ、けふはなあ〳〵とゆふ、一日の日もやすますよふな事ではならん、とくと一つ事上日々の處當番〳〵日の番一つり、これも順序に通りきた、一日の日も心になにもかけんよふにして、きまゝにしてくらすが理なれど、かへりて心をわずらわす、心の理としてけふはなあとおもへども、つとめにやならん日ある、これどふもならん、一日の日、十日三十日、日はつひたつ、一年やない、三年五年やない、長くおもふてくれにやならん、心にかゝらぬよふ、おもはさんよふ、ゆつたりわがきげんかひにしてままにする、三つ子同様にさすがよい、そばからのそだてよふであそ

ぶが、きげんがそこねたらもちもさげもならんよふになる、一日の日つめばん、當番じつとしている、さびしかろふと、きのどくやなあとおもふさかひにほつておけん、すて、おけんとゆふよふでは心がわずらふ、そんならほつておけばよいかとおもふ、それはころりとちがふ〳〵、そんならどふしてよいかわからんとおもふ、とつと一つはなれて、一つ事上心にかけておけば、一家同様、これも一つ尋ねくれ、わかればよしわからねばはんぜんならんとゆふ處は尋ねかへしてくれ。

△又々押て御供に付て相談さして頂きますから只今の御言葉の事に付相談さして頂きますと御願

さあ〳〵まだ〳〵一つ、一致とゆふわけにはゆこまい、かるいといへばかるい、おもいといへばおもい、そこでみな〳〵だんじて精神だけ尋るがよい。

△明治卅七年四月三日御供の事に付前々の御指圖の上より一統協議致し種々教長へ申上教長の御咄し被下上より洗米に改めさして頂度事に付一同決議の上御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、尋る事上はみな〳〵心の中もよぎなき事上であろふ、一時の處といへば、しばらくといふであらふ、まあながらへての事上道とゆふ、あちらかはりこちらかはり、ながれる水も同じ事、ごもくながれてすんだ水ながれば道とゆふ、にごりた水はどふもならん、ごもくばかりや、すんだ處わづかみな〳〵の心煩らふであらふ、一日の日よき處みな待てい る〳〵、又みな〳〵みな〳〵の心やむであらふ、道とゆふ理と

いふ、みな〳〵それ〳〵心とゆふ、年限をかさねば道とゆふ、理とゆふ、理ですんだ水といふてきかす、ごもくながれる時に共にながれてしもふてはならん、すんだ理はその時のぢきもつになる〳〵、これ一つ心年限あひだに、又みな〳〵の精神三つ今一時立あひ、どこもこゝもみな一どの中の煩ひ、天地の間のわづらひ、からだも一つ、ぬくみも一つ風も一つどふなろふこふなろふ境である、みな〳〵の心なんでもこふといふ心なくばならん事におよんだる、よふきゝわけ、一時どろ水の中ですんだ水待つ心、そこで願通り皆々の心道とゆふ、心とゆふ二つ理、それでならん處むりとゆふ事上、ごもくの中のにごりた水のまりやしやうまい、いつついつまでどふ、いつ〳〵までこふといへば、なか〳〵くるしまにやならん、こふといへばこふな



る、どふといへばどふなる、ならん〳〵中とゆふ、中といへばなるよふ行よふ道とゆふ、どこもにごりた水はのまりやせん、すんだ水はのめる、そこでどふなりてもこふなりてもとゆふ、なげだしの心しばらくまだはやい、どふこふなりと今の處みな〳〵の心にまかせおこふ〳〵〳〵〳〵。

△御本席様の御身上につき御指圖の上より一同相談致し、今後心得さして頂きますから此方で日々話て被下方にも注意致ますからと御願

さあ〳〵〳〵、尋る處〳〵前々事上に一言、萬事はなしたる、さあ〳〵日々の處當番詰番どこからながめても、かしこからながめても一つ理、一つ處、身の内の處そこできげんかひにして、しばらくの處〳〵、さあ〳〵充分である、もふ日々の處き

のいさむ處、いさゝかの理である、まだ〳〵これではどふもならん〳〵、そこで一人きげんかひにして、じつとしてあそばしておくがよい、日々の處當番詰番すれは嚴重なもの、嚴重のものは心にどふもならん、やぶん一人の處二人とゆふ、一人の處二人とゆふは、そりやどふゆふものなら、理はそこにある、一人とまりとゆふ、一人とまりはどふでもこふでもなけにやならん、日々こゝろやすますは心とゆふ、きげんかひにして、しばらくの處じつとやすますがよい〳〵。

△洗米の御供幾つぶづゝにして包めば宜敷か御願

さあ〳〵それはもふ當分の處、ほんのはなしの理のよふなもの、御供とゆふは大へんの理になる、皆々もきいているやろふ、さあ〳〵なにも御供きくのやない、心の理がきくのや氣のやすめ、心の理のやすまりにだしたるものや、すれば分量はかりた藥味にだすのやない、どふしたてこふしたて、なにもいやせん、三つ〳〵、これだけしらしておゝたすがよい。

△神樣へ三粒そへて

そふやない〳〵、たつぷりそなへてみつぼみ入れて、あとへ〳〵三つぼ。

△押て三つぼみいれて後へ三粒入れますかと願

それでよい〳〵、しばらく〳〵、世界はなんといふたておめもおそれもするやない、ほんのしのぎにだすのや〳〵、此道といふはなにがいかんかゞいかんといふは道へらすよふのものや、なにもへつたのやない、おほくの中ふしぎやなあ、ふしぎやなあといふはどこからみてもふしぎは神である、これだけ一寸い

ふておこふ。

△おびやの御供は是迄通にさして頂きますかと御願

さあ〳〵これ〳〵そりや尋ねにやならん、一事萬事一つどろ水は同じ理、すんだ水〳〵とゆふは一つ理、これだけこふどれだけどふといへば、すんだ水とはいはん、わからん〳〵、それは一寸もちがはんよふにしてやつてくれ、それはかまはん〳〵、神がしごふするのや、あんしんのものやで。

△明治三十七年四月廿二日平野楢造身上眼なり腦がのぼせ耳が聞えにくふ御座りますといふ處御願

さあ〳〵尋る〳〵、さあなんでもかでも尋にやならふまい〳〵、身上たへられんとゆふ事情、如何な事であらふ、どふゆふ事であらふとおもふ、尋る〳〵尋ねたらまた一つさしづにおよぶ、みなよふきゝわけにやならん、どふゆふものでこふゆふ事になる、どふもならん、いろ〳〵おもふ中にまたさしづはあぢのあるものとおもう、そのあぢのあるさしづしつかりきゝわけにやならん、よふきゝわけ〳〵、年來〳〵何年あと〳〵、一つ事情心に一つ〳〵しらんものあらふまい、いきているものは皆しつている、どんな事もしつている、これからさとすよふきゝわけ、一時はじめはわかりがたない、たゞ一つふたをあけたらなにがある、ふたがとつたらなにがあるやらわからなんだ、日かあつた、世界一つからひきくらべてみよ、みなふたとつたらどんなものもわかる、まあめづらしい處から一つ一つ名がおり、名が出來處々それよりどんな事も日々きゝている、ちいさい處大きとれ、おほきとればよふきゝわけて、眞實こたへなく

ばならん、日々つくしたはこんだ理あればこそ、おればこそ、すがたちよい〳〵みへてあらふ〳〵、中にくるしみの道とほりている〳〵、運んでいる、これなげくやない、くやむやない、どふゆふ處みゑるやら、もふあぶない處こはい處が樂み、あぶない處まさかの時の臺とゆふ、まないたとゆふ、どふゆふ事もせにやならん、唯はい〳〵ではならふまい、まないたとゆふ臺もつてくれ、一人からひとりのさしづやない、みな〳〵その心に臺とゆふ、心治めてくれにやならん、身にくるしみはいふまで、また道の爲國の爲、今たてあひどふゆふ事になるもこふゆふ事になるも、一つまないたとゆふ事き、わけ、これだけさとしたらどふゆふ事にさとろと、どふゆふ大き理だそふと、どふでもなる、なげいた事ではならん、よふき、わけ、いつ〳〵さしづにも一日の日とゆふておよんだる處ある、これき、わけ、かんなんの道とふりた理はみなみゑる處はたらきた理とゆふ、身上はあんじる事いらむ、あんじる事いらむで、ながい道筋一つの處始めかけたる處からかんなんの道とゆふ、世上にはいろ〳〵いふものあろふ、いふ處なくば一つわからせん〳〵、ちいさい處は誰の目にもかけるものやない、日々つたへている、あれやこれやと敵なくばいかりやせん、どふゆふ事あるやらわかりやせん、けふのさしづいつにでるやらわかりやせん〳〵、此心もつてくれにやならん。

△押て臺と仰被下は分教會の事でありますか、本部の事についてでありますかと御願

さあ〳〵わからにや尋ねにやわからん、よふき、わけ、あひづ

たてあひといふたる〳〵、よひ事にもまたわるい事にもとらにやならん、どんなあひづたてあひあるやら、年來につたへたる〳〵、また手もつけたる、その日きたらどふでもこふでもとゆふ、その時一人臺とゆふ、どふゆふ事ならまないたといふ、どふゆふ事もこふゆふ事もその上でわかる、これ一つしつかりきゝとりておけ。

△明治卅七年四月廿八日授人御運び濟し後の御指圖

事上願は正面來て尋るのやで、正面きて聲高に尋るがよいで。

△明治卅七年五月十六日桝井政二郎妻おすゑ卅九歳

安產後の身上障りに付御願

さあ〳〵〳〵さあ尋る事情〳〵、さあ身上事情尋る身上の理尋る、いかなる事情もさとするによつてよくきゝ、わけにやならん、さあ〳〵よふきゝわけ、第一一つゆるしとゆふ、ゆるしとゆふ心の理みな〳〵あろふ、この一つ理からよふきゝわけにやならん、どふゆふものでこふゆふ事になつた、さあ〳〵よふきゝわけ、第一ゆるしとゆふ、世界にまでおよぼしたる、身上の處あんざんらく〳〵ののちこふなる、のちかんがいもつこふまい、さあ〳〵よふきゝわけにやならん、あんざんからこふなるとさらにもつな、是は世界ではたいそふの理である、あんざんはらく〳〵、あと一つのりである、さあ〳〵なんでもこふなる、よふきゝわけ、この理あと〳〵身上なんとならんの理、事情いんねんの理さとしおくによつてよふきゝわけ、なんぎさそふふじゆうさそとゆふおやはない、兄弟はない、此理からさとすからよふきゝわけ、まあ一時の處一時どふとはない、いんね

んおや〳〵、それ兄弟それみな〳〵の心もなくばならん、此のいんねんさとしてくれ、これだけの順序の理さとするによつてよくきゝわけにやならん、ほんにそふやなあといへば身上の處一時どふとはあんじる事いらん、おや〳〵日々といへば心だけの事いる、しつかりとこれを定めてくれ。

△押て桝井の二男安太郎の事でも御知せ被下ますか

さあ〳〵尋る事上〳〵、さあ〳〵ぜん〳〵心一つ事情どちらかちこふこちらどふよいりとゆふて、なるほどと一つ順序の理おさめたもの、事情によつてよきもあしきも親子でも兄弟でも心の理はべつは、たゞ心まで日々日すぐる、第一これよふきゝわけにやわからせん、親の心にとればかわいもの、なんとゆふにんの心、おやのいんねんとゆふこれ一つよふきゝわけにやわからん、年限たつたそののちはどふこふとゆふ、日々の事情同じ兄弟同じ中にもよく暮しているもあれば、どふこふともいふにん心とゆふは、めん〳〵のもの、身上かりものゝ中に心にまちがい、また〳〵じぶんからの心はどふもならん、長らへての道すじ、生れ子どふよふ一つ心から一つ事情、ならんかんにんするがかんにんとゆふ事もあるやろふ。

△明治三十七年五月二十二日本部墓所に桁行八間梁行三間の祭場建築御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ〳〵尋る事情もふどふでもこふでもなけにやならんもの、事上願通〳〵ゆるそ〳〵。ずいぶん廣くなけにやならん、ざつとしたものでよい、みな〳〵小兒もどりてくる、大きものしてざつとしたもの、廣きもの事情願通

〳〵心おきのふいつなりとかゝるがよいで。

△山澤氏の家を他へ移す事御願

さあ〳〵尋る處〳〵、まああちらこちら一寸〳〵、あちらとゆふこれまでの處どふでもこふでも處々どこなりとこゝとゆふ理はこゝがよかろふ、どこがよかろふこゝといへばこゝ、どこといへばどこ、ゆるしおくによつて、運ぶがよい、一時の處又建物はたてものについて、唯一ケ所ではどふもならん、みな〳〵いさむでやつてくれ、又々後がいそぐ、どふなりとこふなりとしてやつてくれにやならん、此理を早く治めてくれるよふ。

△押て相談の上申上

さあ〳〵ずいぶん建家の處、東へよりこゝからぼつとたてるがよかろふ、一つ理もとりなほもやつてくれ、これはどふなりとせんならん理である。

△明治三十七年七月一日山名分教會理事村田熊三郎

妻せい三十一歳身上御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、身上事上尋る處〳〵、さあ〳〵一度二度身上さあもふならん〳〵ならんで、日々の處とほりきたる、さあ〳〵身上の處よほど事上たいそふ、もふ一度の處もふ一度とゆふ、又候身上よふきゝわけなんでやなあとおもふなれど、よく事上きゝわけにやわからん、これまでの處いくへの道いくへの理、いくへの處中にこふゆふ事であゝとおもふよふきゝわけにやわかりがたない、いんねん〳〵、いんねんならとゆふてしまうてはどふもならん、此道よふきゝわけ、人間とゆふ一代といへばたよりないもの、ならん〳〵の理きゝわけ、これみな

前世いんねんのさんげとゆふ、内々ならん〳〵の中一つこれ道とゆふ心を定め、ならんがたんのふとゆふ心を治めてくれ、なるならん前世いんねんのさんげとゆふ、なれど一時ではないよほどたいそふとゆふ事上である。

△明治三十七年七月十一日増井幾太郎四十二歳大東
小玉二十八歳結婚御許の義御願

さあ〳〵〳〵尋る事上〳〵、ゑんだん事上尋る事情、一日の日をもつて尋る事上、一つ理一つ心たがひ〳〵事上、一つ一日の日の心事上、いづれもながらへての事上であらふ〳〵、どちらもこちらもぜん〳〵事上はなしあひ、どふしてこふしておもふ、一つ理なるよふにしてどふこふ一日の日をもつて尋る事上、事情將來心の理なら十分の理心を運んでくれ、一時とりいそぐの事上に事上はすみやかゆるそ〳〵さあゆるしおこふ。

△明治三十七年七月十一日城法部内白石布教所擔任
寺田政二郎五十三歳身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ身上から事情、一つ理尋るから順序理さとしおこふ、なるほどはなし〳〵とゆふたとて身上がふそくなればどふもならん、又一時事上おもふながらへての道とゆふ、中に一つ心とゆふ、年々の心つくしはこびきたる、十分にうけとりたる、人間とゆふ一代といへばたよりなきもの、此道年限の理つくしたる將來末代のはじまりとゆふ、どれだけ心に持つていても身上不足なればよぎなき事であろふ、此道よほど心に盡しくる理、みなうけとりたる、又一つよふきゝわけにやわからんで、心に一つ道心一つだん〳〵事上、一つ理つみか

さねたる理、さあ〳〵今一時身上の處よほど大そふ、存命心の理充分まんぞくの理をあたへてやつてくれ〳〵、みな〳〵の理十分の理さとし、十分のまんぞくをあたへてやつてくれ、此の道の理處に一つ名稱とゆふ、此名稱一代に一つ事情とゆふ、これ將來末代の理のこる理人とゆふ、だん〳〵事情なが〳〵道をとほりたる、滿足あたへて至急一つの理運んでまんぞくの理をあたへてやれと、一つさとしおこふ。

△押て安心樂しみは出張所に引直して滿足を與へやるもので御座りますか、小兒の相續の處目下兵士に參り居る處で御座りますか御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、わからん處は尋にやならん、尋ぬれば尋ねだけの理さとしおこふ、世上とゆふ一般の理のがるにのがれられん〳〵、身上一つの理すくる事できん、道の爲に盡しこふのふとゆふ、一つできもふ一つ一日の日を早くあたへてこそ將來一つ理、滿足たのしみの理であろふ。

△明治三十七年七月二十七日御本席樣御身上御障りに付御願

さあ〳〵日をもつて尋ねにやならん日がでゝくる、さあ〳〵日をもつて尋ねにやならん日がでゝくる、もふこれ一度どふでもどふにもいかんから〳〵、一日の日をもつて尋ねにやならん日がでゝくる〳〵。

みな〳〵よくよふきゝわけにやならん、あれこれとりまぜのはなしする、もふながひはなしではない、夜があけたらあかひ日が入りたらくらひ事きまりたもの、二つ三つほとの理をさとし

おく、よふきゝわけにやならん、身上どふもならん、どふもならんとゆふて日がたつた〳〵、けふの日どふゆふ事さとすなら、みな〳〵これまでよほどのくろふ年限おいたであろふ、年限おいた中にたのしんだ日があれど、くるしみおほひたのしみは四分、六分はくるしんでいる、ならん〳〵の日をたつた、そこであきらかの事待つてあらふ、あきらかな事まてば日々にあきらかな心をもつて日々はこんでくれにやならん、それはどふゆふ事におもふ、どふゆふ事なら心はめん〳〵の持より、心あさやかな心にみな〳〵の心をさまればよし、一日の日あるにより日がつんでしまふてはどふもならん、若きものにもよくしこまにやならん、これまでのこしおいたる席とゆふ、これだけの理さとし場所とさしづ、これまで時々さとしたる事ある、よく心にわきまへてくれにやならん、治まる事もあればをさまらん事おほひ、治まらねばどれだけの事運んでもなにもならん、始めはかろきいさゝかの心を傳へて道できたもの、一時始めからいちぶしじふできやせん、よくきゝわけてくれ、これまでの道よほいならん道教へ、一つの理から年々に道できてきたる、よふきゝわけにやならんで、これがいかんどれがいかん教へ一つの理をほつてしまふて、世界一つの理とりはこび、とほろふとおもふたてとほられやせん、よほどむつかしい、これまでの日をかぞへてみよ、年限の内一ケ年たつたら、これだけ〳〵と世界うつりたで、國々までおよぼした世界うつしにくい〳〵とちよとはなししておく、そらなにもならんとはいはん、世上の道三四十年いらいの道からさとすなら、萬人の中ほんにそれか

らできてきた道かひなと、どこへいたとてとくしんできんでは
ないとさとしおこふ、ならんとおもふていたとてさつぱりの日
なつてからどふもなら、これまで國々遠くいとはずしてでゝく
るものにみなさとしたであらふ。
わかきものにしこまにやならん、やりこひもの〳〵はとしより
もわかきものと、こどもゝみな〳〵どふであらふ、今席とゆふ
たら教祖とはちがう、なれど萬事いりこんでのはなしすれば教
祖一つの理も同じ事とさとしおこふ。

△明治三十七年八月九日船場分教會部内島船出張所
擔任城戸清治郎を以て一度府廳願致候處却下に付
分教會長兼務の御願ひ

さあ〳〵尋る事情〳〵、ぜん〳〵にも一つこれでと思ふ處事情
〳〵、さあ〳〵どふこふ一度やない〳〵、二度やない〳〵どふ
でもこふでも一度二度の處、みな、心なれども世界なみの心ば
かりでどふもならん、むつかしいなる〳〵どふもむつかしい、
なるよふきゝわけにやわからんで、そこではやく〳〵よりあち
らの區役所こちらの區役所は世界なみ〳〵、世界なみになつて
はならんとぜん〳〵より事情にながれなよ〳〵と、ぜん〳〵事
上にさとしおいたる、今一時の處世界なみもおなじ事、おなじ
事上これよいと世界一つ理はこび、どふもならん事上は一つの
道どちらにもなりてもゆるそ〳〵、さあ〳〵ゆるしおくがなに
よの事これよふしやんせにやならん、世界あちらにもこちらに
も事上、むつかしいなりてどふもならん、これ〳〵だんじや
い、夜るをひるとの心をもち、よるとひるとの心をもつてく

れ、いかなる心もとほりてくれにやならん、皆々にうつしてくれだん〳〵うつしてくれるよふ。

△明治三十七年八月二十三日日露戰爭に付天理教會に於て出征軍人戰死者の子弟學資補助會組織致度義御願

さあ〳〵尋る事上〳〵いかな事も尋ねにやわからん、さあ〳〵今此一時一つ世界といふ中に一つとゆふ理は世界にある、そこでこれまでどんな事も言葉にのべた、言葉にのべた處がわすれる、わすれるから筆先にしらしおひた、筆先とゆふはかるいよふでおもひ、かるい心もつてはいけん、みな〳〵の臺であらふ、とりちがいありてはならん、此臺世界の事上もふどふなろふか、こふなろふか一つの臺、敵は大きもの、全國においても大そふといふ、ふるき〳〵事に年限からさとしてある、此一つの心得はけふの事やある事いふた事はない、もんかたない處から順序あろふてきたる、道むつかしい事のぞんでなんぎくろふさす道をつけたのやない、ほのかにきゝているやろふ、理は一つにまとまりてくれにやならん、みな〳〵よふきゝわけてくれにやならん、道とゆふ道は樂の道は通りよひ、むつかしい道はとほりにくひ、むつかしい道の中に味ひある、よふきゝわけ、敵とゆうてねらみあひ〳〵といふ、一時の處うまひよふにおもふ、うまい事やない、なんでもかでもといふ、これまでさとしおひたる理はかなな、やろこい中にかなめ〳〵の言葉さとしてある一時の處言葉だけではわすれやすい、かきた事はわすれんもの、一時このさひもふこれなあとゆふ、なにかおさめかたみ

なてもつけてある、皆一時一つにまとまる事がさておいて、あちらからちよいこちらからちよい、まとまりた處がしれている、年限かぞへば幾年たつもふどふもならんかひなあと、いふ處から世界の道よぎなく一寸つけたる、眼目の中に一つかな、理につけてある、一時どふもならんとゆふ、よぎなく理ある、こんさきから前にさとしてあるしやんしてみよ、道とゆふ道はどんな中も運んでやらにやならん、また一つ處々又一つ心ざしや〳〵理がおもふから心ざし早いやない、おくれてある、そこでよくきゝわけ、もふ一時尋る事上、それはなんどきにてもゆるしおこふ、大き事すつきりこれではどふもならんといふ處迄いてみよ、これではならんといふ處迄いかにやわからせんで。



△押て教會長を會長に御願

さあ〳〵もふどふでもこふでも、一つ臺とゆふて、元とゆふものなくば世界しやうちできやせん、いかな事もよふきゝわけにやわからん〳〵、まだ〳〵ちよとはじめ、始めかけたらどんな事はじめにやならんともわからん〳〵、これはどふやろふこふやろふとさしづとるがよい、さしづとれば何もおそれる事はない、もうあかんかひなあ〳〵〳〵とゆふはふしといふ、精神定めてしつかりふんばりてくれ、ふんばりてはたらくは天の理であるとこれさとしおこふ。

△明治三十七年九月十日澤谷源次郎六十二歳身上御願

さあ〳〵〳〵尋る事上〳〵、さあ身上とゆふいかなる事であろ

ふ、おもふ處さあ〳〵だん〳〵事上いかなる事上、さあ〳〵いかなる事上みなそれ〳〵の中とゆふであろふ、さあ身上にかゝる處どふゆふ事であろふとおもふ處さあこれまでなか〳〵の道、あちらのどふこちらにこふ、みな自由自在になりきたる中、よふ〳〵きゝわけにやわからんで、さあ〳〵おもふよふになりて、もふこれとほい處〳〵、それ〳〵の中えといへばはじまり一つである〳〵〳〵、これからの心に理さとするによつてよふきゝわけにやならん、今一時事上なにがあんじる事いらん、これより一つ理さとす、身上年限をい〳〵道といへばみなそれ〳〵〳〵年限、この二つのり處々に理の元といへば一つ理、充分の心である、これまでの處理とゆふはよほいならん日をとほりきたる處はみなこれつきとめてあるによつてこふとゆふ、本部一つに治めたのしみの中であろふ、樂みの中に一つ一代の心にわすれやうにもわすれられん、これとゆふはこれあれとゆふ、あれみななりきたる、此理心にをさめ、一つ理治めてくれ、あんじる事いらん、あんじたぶにやならん、これみな〳〵の心に一つ理も定めてくれ〳〵〳〵。

△明治三十七年九月二十六日仲田楢吉四十一歳身上

御願

さあ〳〵〳〵尋る事情〳〵、さあ身上とゆふ一つ事情、さあ〳〵いかな事上でどふゆふ事尋る處〳〵、さあ尋るから一つ事情もさとしておこふ、さあ心とゆふ理おさまりなくば何度さとすも同じ事、けふだい〳〵兄親兄弟、それ〳〵兄弟事上みな〳〵一つ事上いかなる心もさんげあらためくれ、さあ第一よく

きゝわけにやわからん、道とゆふものなにわからひで道とわいへん、道なら道のよふなる事わけてこそ道である、さあとほからん事やない、古き事やありやせん、戰場事情一つさあ年限はわづかの年限である、それからよふ心よふきゝわけ、まちがふから一つ理すみやかゝけふの日かゝるどふもならんなれど、將來心にあらためるなら身上すみやかとゆふ、一度二度ならぬあひそつかし言ば身上にかゝりてさしづとゆふ、よふきゝわけ、兄なら兄、姉なら姉いかなる事もあらためさすが兄弟一つの理、外々の心やない、道の上一つそれ〳〵の心をそへ、あらためてこふ事上といふ、しつかりこふとためさしてくれるよふ。

△明治三十七年九月三十日中和分教會長更迭御願

さあ〳〵〳〵尋る事情〳〵、さあ尋る事情前々事上、また前々事情だん〳〵事上、さあ〳〵みな〳〵事上尋ね出る事上はやういやあろまい〳〵、さあ〳〵前々事上一つ又一時事上をもつてこふとゆふ理尋る、尋るにはみなそれ〳〵よりあふた中の理、どふせいこふせいこれがよかろふ、あれがよかろふ、精神みな〳〵の心の精神、心精神みな〳〵心の精神また〳〵事上、さあ〳〵かはる人とゆふやういやあろふまい〳〵、一つ事上精神一つ事上、なにかの處とゆふ、みな〳〵の心とゆふ、なんであろふ〳〵、なんであろふがよふきゝわけ、いかなる事もどふゆふ事もあぶないこはい先とゆふ道はあざやかとゆふ道である、しばらくの處〳〵、十分のばしてやつてくれ、いかなる事精神みな〳〵の心にゆるしおこふ〳〵。

△明治三十七年十月十九日兵神部内加古支教會々計
五十九歳身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ身上事上一つ理尋る、さあ〳〵尋るから一つ又事上によりて一つ理さとしおこふ、よくきゝわけにやわからん、さあ身上不足なんでやろふとおもふ、いろ〳〵心まよふながらへての道をつくした、その中にこの身上不足、みなそれ〳〵心日々の心である、十分一つ事上さとしおくによりてよふきゝわけてくれにやならん、さあ〳〵ながらへての心、どれだけつくすこれだけつくす日々うけとりある、理はかならずうけとりある、また身上なぜこふなるとおもふやない、此道とゆふそれ〳〵にさとする理よふきゝわけ、おなじ人間同じ小兒である、なんぎさそふ不自由さそふとゆふ親はない、またこれからとゆふ中に身上不足なりたのしみありやせん、身の内こふなりてどふこふ成程身分も一つのかりものとゆふ、此の心をさめてくるしみの中のたのしんでくれ、ならんできんさんげするが前生よりのさんげとゆふ、一つよふきゝわけ、なんでも一つたんのふしてくれ、一時どふとはない、つくした理は將來末代とゆふ、此理きゝわけてくれ、一つ理まんぞくあたへてやつてくれるよふ。

△明治三十七年十月二十二日富田傳二郎妻たき六十
歳身上御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、さあ〳〵身上さあ一時事情一つ理尋る、尋るにはもふよく〳〵の理であらふ、尋るはよく〳〵の理であろふ、どふでもならんどふでもいかんとおもふは、日々心

とゆふ、一つ理尋る身身上不足なる、なぜこふなると日々おもふ、一つ尋るから何かの理もさとするによつて、よくきゝとらにやわからん、さあ〳〵此道とゆふよふいでなろふまい、ぜん〳〵ながく間ではいろ〳〵一つの理、年限とゆふ理おもふてやう〳〵の理なるならん。

おもふだけのこゝろは盡してある、日々はたらいてある日々盡した理は日々の理でうけとりてある、つくせばつくすだけの理ある、又身上とゆふ心大きいもつてくれねばはつさんできよふまい、しつかりきゝとりてくれにやならん、さあ道とゆふ年來にかさなり〳〵、年限の理より出來た道である、さあよの事も世界にうつしある、はたらいた理は金錢づくでかへるか、さあどふなる、さあ心とゆふはたらひた理、世界にあらはしある、身上に不足なりてどふもはやくなあとおもふ、さあ〳〵身上ぜんしよふにんなくなり、こふなるどふなる、前々にはかはいなあ、又ぞうろふ此理心にかけず、先これからなんでもとおもふ、大き心をもつてくれ、さあ〳〵何時ともわからんとゆふよふなこゝろをもたず、此心に治めてくれ、なつてもならいでも、どふどふしてもとゆふ、此心得將來末代とゆふ、心にたのしんでくれ、まんぞく心にあたゑてくれ、日々によはるなあといふ心をもたず、たのしんでくれ、人間とゆふ一代きりとおもふからたよりない、なれどそふやない、末代とゆふこの理金錢づくでかわれん、これ世界にうつしある、なろふとゆふてなるものやない、天然とゆふこの心をもつてくれ、さあ一時どふとはないなれど、はやくはつさん〳〵うれしいなあと、これを早

く心に此の理はつさんしておさめてくれるよふ。

△明治三十七年十一月二日御本席様御身上御障りに付御願

さあ〳〵〳〵尋る事情〳〵、さあまあ鳥渡身の處あちらこちらだん〳〵、さあ〳〵なにがしらすやらとおもふよふ、みな〳〵のものも心得てくれにやならん、時とゆふ今一時の時とゆふであろふ、十年以來からどふゆふ事できるやら、こふゆふ事できるやらとおもふ、數年來よりかなな事に筆にしらしたる、これをみな〳〵よふきゝわけ、十年とゆふや一と昔といふ日きたる、せけんそふぞふの咄し道からしらしたる、一つ理長い間に皆々筆にとりたる、これをみな〳〵心に理を定めてあらひかへてくれにやならん、時とゆふしゆんとゆふ、時はづれてはならん、そんならどふしたらよかろふと、めん〳〵精神心にあろふ、さあ〳〵よふきゝわけてくれにやならん、どふでもこふでもあら〳〵の道みなついたる、ほそい〳〵道に鳥渡しらしたる、その中にあつい理を頂きているものもあれど、くるしんでいるものおほひ、またほのかにきゝていればあんな事とゆふものあろふ、臺とゆふあら〳〵年限とゆふ日があろふ、めん〳〵どふなりてもこふなりてもとゆふ精神の理、心一つに結んでおかにやならん、鳥渡はなしかけたる、これをよふしやんしてみよ、國の爲とゆふて存命はたすものもあろふ、また此道とゆふは尙も心一つに治めてくれにやならん、よふきゝてみな心一つにもつてくれにやならん。

△暫くして

さあ〳〵一言いふておかにやならん、何れなるやろふ〳〵、どふでなるやろふとゆふてなるにきまりたとゆふ心、みな〳〵の中にあるやろふ、ようしやんしてみよ、時とゆふしゆんとゆふ、時ありやしゆんある、しゆんがはづれたら一かけからくみかへせにやならん、さあ〳〵どふでもこふでもなげすてゝなりとも、一人の心にしつかりとよせてくれにやならん、なんぼよつても一人の心によるこゝろあれば守護とゆふ、そこでいつまでも同じ事である、一心をきめてくれにやならん。

△どふゆふ處であろふかと相談中へ

さあ〳〵ほんの言葉だけでゆふたぶにやわからん、言葉は其場だけのもの、言葉の理をこしらへてこそ八方人がしるであろふ、これも鳥渡はなししておかにやならん、さあ〳〵此場で一つ理どふしよふこふしよふ理、それはわかろまい、ちよい〳〵筆にとりた處から談じ出るがよかろふ。

さあ〳〵又もう席といふたらよほどの年であろふ、席はきげんかひにしておかにやならん、又日々勤めといふは勤めせにやならん、勤めは心のはたらき、また勤めすぎて氣をやます事ある、席は三つ子どふよふにしてほんのそのまゝ、心まかせにしておかにやならん、日々勤め當番當番それは大切の理、却て大切の理、氣をやすます事ある、心にかけんよふにして、これはこふしてんかへとゆふ處までかまわんよふにしてくれ、かまひすぎて心をやます事ある、あちらはたけのはし、こちらはたけのはし、さあ〳〵けふもよひかひなあとゆふて、あちらへゆへ

ばついてゆき、こちらへゆへばついてゆき、氣をやまし心を煩すよふなものなれど、心みきりてしまふてはならん、ぜん〳〵さとしたる事ある、門中はひとりあるきさすがよい、日のじふとゆふはかまはず、これはこふどれはどふ、心にもつてこれだけとゆふなれど、夜分はなんでもかでも一つはらして氣のやすまるとゆふ事を心にもつてくれにやならん。

△相談の上御願に出ますと申上げし時

さあ〳〵まあ一とことゝ〳〵、今はどふでもこふでも我一同國の爲みな〳〵心をはこぶ、これは十分の理である、又一つ大ぼふ心はたさにやならんなれど、道の理はころりとちがふ、さあとゆふたらさあといふ、こゝろをみなもつてくれにやならん、これを談じあひの角めに鳥渡はなししておこふ。

△明治三十七年十一月五日此間結構に御言葉頂戴致しまして昨夜居合す本部員協議を遂げましたが何分目下無人勝故一同揃ひまして協議の上御願に出ますと申上

さあ〳〵尋る事上〳〵、ぜん〳〵事上一つさとしたる、一つ理十分にさとしたる、あちらからもこちらからもかたがたの理、心に持ているやろふ、十分の理なにかの事も一つ理、又一つどふこふ中にこれなら〳〵と意見一つ、今しみな〳〵の中そふぞふの中、もふ一日の日とおもへば尋ね出るがよい、これ事上さとしおこふ。

△明治三十七年十一月六日撫養部内釜山布教所、鎮座祭舊暦十一月四日開筵式同翌日入社祭及説教日

毎月舊暦十二日神樂々器六つ當日信徒へ御神酒御供授與の義御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、さあ事上は願通り〳〵、さあ〳〵ゆるしをこふさあ〳〵ゆるしおこふ。

△明治三十七年十一月十九日山名分教會奉告祭に付明日より御本席様御出被下義御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、尋る事情は願通り〳〵ゆるそ、ゆるそ、さあ許しをこふ、何にかひつそふにしてするがよいで、をくりやむかいもひつそふにしてするがよいで、ゆるそふ〳〵さあゆるしおこふ。

△喜多、高井隨行願

さあ〳〵尋る事情〳〵、尋る事情は願通り〳〵ゆるそ、ゆるそさあゆるしおこふ。

△明治三十七年十一月二十四日山名奉告祭執行に付教長様明日より御出被下義御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、さあ〳〵將來の理とゆふてたのしんでいる事上願通り〳〵ゆるそ〳〵、さあゆるしおこふ。

△隨行員梅谷、山澤、篠森、飯降御願

さあ〳〵尋る事上〳〵、尋る事上はみなそれ〴〵心とゆふ事上、願通り〳〵ゆるそ〳〵、さあゆるしおこふ。

△明治三十七年十二月十四日過日の御差圖により一同協議の上第一部下を養成するに對し以前教會に關係ある本部員整理の爲趣き關係のなき教會は教長様の命により神様の御許を頂戴の上養成する事

さあ〳〵〳〵尋る事上〳〵、前々の事上から一つ理を尋る事上、いかな事上も尋ねにやわからん、さあ〳〵よふみな〳〵心にしつかりと心に治め、道とゆふものは成程といふ理たもたにやならん、先々とゆふであろふ、遠く處といふであろふ、人間業で出來るとおもふてはちがふ、人間業でできるものやない、遠き處は遠き處のよふにはかり、ひと目に見ている、そこで先々まづどれだけの事にならうとゆふ、これをみなよふきゝわけ、一年二年三年みなそろふた年はない、くるしみの道とほりてこそたつ、おほきくなる、これから大き心をもつてくれにやならん、もつてくれにやならんの處、いち〳〵物をもつていてどふとはできよふまい、そこにひとつの情あひとゆふ心ある、



一人たすけたら百人たすかるとゆふ心もつてくれ、一人くるふたら萬くるふならん事せひとはいはん、一人助けにや萬人助かるといふ理、心におさめにやならん、何がちがふ幾國何人あろふ、元ひと處小供一人そだてはみな〳〵そだつ、一人つぶせばみなつぶれる、長い道筋のあひだ、年々によりあふたかはりたはなし、かはりたはなしとはおもふやろふ、そふやない前々から田の中、野中の事おもふてみよ、神はうそはいはん、教祖存命つたへたる、年限まできつてきかしたる、これだけのものどれだけのもの、金もつたて世界にひろげられるよふな事はない、これはみな神守護樂み中もちがはん、樂の中にくるしみとゆふ、くるしみの處とほりぬけにやならん、元から大きものはない、一年は一年、二年は二年、三年は三年の理みえてなくば

うそである、そこでみな〳〵心をもつてこふもせにやならん、どふもせにやならんと、めん〳〵の心にもつてくれにやならん、時き〻わけてだんじあひ〳〵の心、水ももれんよふ十分運べば神の守護とゆふ、神の守護はめづらしきもの、しばらくの間むつかし困難道も困難、世界も困難辛抱とゆふ、元國の心みてやれ、これから見ればどんなしんぼうもできる、年々にかさなりたる、これをしつかりき〻わけてくれ、みなならん中からする、こへとゆふものは早ひめからせにやできやせん、どんなかんなんもふんばりてくれ。

△教祖様の二十年祭も近く表門の西へ石垣を築き塀を設け内らの設計致度御願

さあ〳〵まあどふなりこふなり、これだけどれだけどふせにやならんとはゆわん、みな〳〵精いつぱいにしている處はみている、なれども年限おもへはもふなあといふこ〻ろあれば心丈ゆるす、むりにどふせいとはいはん、時とゆふしゆんとゆふ、世界からみればどんな事もみている、ならん事むりにせへとゆふた處ができやせん、もふこれだけとゆふみな心一つの心になりてくれ、ひとつになればつよいもの、そも〳〵の心はどふしてやろふ、こふしてやろふといふたとてできん、そこでひまがいる、もふこれからみな心とゆふは、一人の心によふあれだけの心をそろふたなあとゆふは、世界にどんな事もうつる、これをよふみな〳〵の心に持てくれにやならん。

△しばら〻くして

さあ〳〵鳥渡一言いふておく、まあ年をあけたら何年になる、

これではいかんとゆふは十分の心なるたけゆるすといふてある、なれどもよふ一つなるだけの事心だけゆるす〳〵といふ、まあちよとの働き〳〵、日々世界からよふできるなあといふ、一つ中にどふであろふ、まあ心によふ〳〵とゆふ、あれかひなあと山にかすかにほつとみえる、世界の理よひはなあと、そこで一つ夜があける、夜があけたらそらなあといふ、たのしむ日がつひみるてあるのやで、是をほのかに鳥渡しらしおく。

△先刻の御差圖に一人の心から萬人助かるといふ處は先々擔任教師の事を仰せ下さるものかと申上

さあ〳〵みな〳〵これおほくの中、處々國々とゆふまああのものかひなあといふ、處々の理そこで心のつかひかた、心のつかひかたたゞしどんなもある、にんとゆふたら一人とゆふ、一人



たすけたら萬人助かる、みなこれだんだんに國々へまはりてみている、一人の中に三人五人も何十人もあるとゆふ、その中の心はさんらんの心なつてなんぼふいふたとて心からでるものはどふもしよふがない、今日は西とも東ともわからん心ある、それはその中の理くるしんだもの、中に一人でも誠むすんで聞分ているものなひとはいへん、元ひとつの心からどんなものもできる、その心みてやれ聞てやれ、これは種子になるほどに、ほんに今迄とゆふ、今はなあ今はこふゆふ道でけふはどふしよふ、あすはどふしよふとおちいつてしもうたものもある、道にはなれられず、道についていた處がなあといふものもある、一寸〳〵と言葉でなりとまんぞくあたへば、それから一つ理わかりてくる、成程とゆふ心持てくれ、あんなものこんなものとい

ふてしまふてはならん、これがいかん、あれがいかんとゆふは道のきづといふ、あちらがくもりこちらがくもりするからひまがいる、せつかく細道つけ、これだけこふなるはよほひでなるものやない、道のためけふの日いかんとゆふておくりいるものもある、種とゆふはいさゝかのものから大きものになる、年々につくりあげたらどれだけのものになるやらしれん、しつかりと心にきゝわけたか。

△明治三十七年十二月十六日本部節會の事に付協議の結果本部長に申上本年は時局に付本年に限り節會見合事御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、事情はそれはよぎなき事上であらふ〳〵、此世一つはじまりてから一つ全國において大變〳〵の理、大變とゆふは五年十年二十年やない、これまでだん〳〵さとしたる、よふ〳〵どふもならん日におよんだる、道は六十年いらいかと始めかけたる、みなさとしつめたる、だん〳〵あらはれたらどふならん日になるとさとしたる、此道月日がでゝはたらいて大變の事萬事たすけあひといふたる、たすけあひとゆふは年々せちとゆふしきたるなれども、どふで一つおこりた事はすむ日もあらふ、そこでそのまゝこふせにやならんどふせにやならんとゆふは十分の心である、一年大もふな事やすんだ日とゆふは、よの事でやすむのであらふまい、世上にしてそれは大もふの事とさつしるは、それは取次十分の理である、ぬけめないよふ、そこでどふしたらよい、こふしたらよいとはいはん、道にこふしたらよいとゆふは何よの事も願通り〳〵、一時

の處事上はきゝとりてやろ〳〵。

△從前の御供鏡餅を十分の一に致し、他は金額にして本部へ供へる事、本部は其金を以て軍人救護の費に寄贈御願

さあ〳〵尋る事上、まあ道とゆふものはこれは一つ心の道、神とゆふものはなにほどつんでくれたてどふともいはん〳〵、みなこどものする事、小供のする事こふしよふとたつりは親がゆるしてやるが、理よくこゝろにかんがへてみよ、そこで尋ねたらこふゆふ事であつたと、どふゆふ事であつたと、そふだんあつめて、どふしたらよいこふしたらよいとゆふは、年によりてしゆんによりてきゝとりてやろ〳〵。



△明治三十七年十二月十七日寺田半兵衛身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ身上とゆふ、一つり尋る、さあ身上理尋るよほひならんから尋る、身のせつなみ事情とゆふ、これまでながらへての間、どふこふふもふいかん、ならんをもい〳〵の日の處おくる處日々どふこふ一つどふもならん、一つさしづさとしをくによつて、よふきゝわけ、さあ一人の中やあろふまい、みな〳〵の中みな〳〵の心とゆふものなくばならん、一つ處りを理たるよふいでなつたものやない、一人の事情でみな〳〵心とりなをし、それからとゆふ、名稱とゆふものはよふいのものやない、みな〳〵一つ心にあわしてくれにやならん、よふしやんしてみよ、一戸むすぶもよほいで出來るものやない、だいの元をこしらゑたるものこれ、なか〳〵のり、それ

〳〵もこの心一つもたにやならん、ふんばつたるもじゆんじよふ一つのりにそへてくれ、身上どふしてもならん、年限の間身上ふそくなりてどふもこふもならんが、みなそもそもではどふもならん、元とゆふものは金錢づくめでかへるものやない、眞實の一つ心をだし、一つどふこふりを尋ねば心はいさんでくる、たゞ一つこふのふより眞實のをもいたつものやない、よふしやんしてくれ、一時どふとはないなれど、何よの處もまんぞくあたへてやつてくれにやならん、これを一つの事情にさとしおこふ。

△增野正兵衛尋ねに趣く御願

さあ〳〵尋る處〳〵、一つはなしとゆふはみな〳〵さとしよふ、とりよふとゆふ、道とゆふものしつかりとつたへてくれ、それ〳〵の中もどふしてこふして萬事の中もをさめてやつてくれるよふ。

△明治三十七年十二月二十二日松村のぶ三十七歳身上御願

（左のかいなと又後に右のかいないたみに付）

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ身上とゆふならん〳〵尋る事情〳〵、いかな事とおもふ、さあもふは日々であらふ〳〵と、どふゆふ事でこふなつた一つをもふ、なによ身上どふゆふ事尋るから一寸さしづにをよぶ、身上どふもふしぎ、日々の處だん〳〵事上をもふ、何かどふこふわからんわからんから一つ尋る、尋るから一つさとしをくによつて、よふきゝわけにやならん、さあ〳〵身上一つ心のわづらい、心わづらいはなんたる事

とおもふ、一時身上どふもならん〳〵とゆふ、なれど身上一つあんじる事いらん、あんじたぶにやならん、一つ事情はよふいやない〳〵何か萬事心得のため、しんじよふの心得のためさとしおこふ、さあ身上から一つこふゆふはなし、何よの處も一つ事情それ〳〵の談じもある、しらしもある、身上から尋たら一つさしづもあつたと、みな〳〵一つ心得てくれにやならんさとしおく心を日々の處よふきゝわけ、ふるき事情にもさとしたる、たのしんでゆるしてもらふ道やないとゆふたる事もあるなれど、何年たてど〳〵心のみはこぶ處もある、それは一つ事情どふともいはん、何ほどたてばとてどふすればとてどふもいかん、いかんとて何もふそくゆふのやないで、これ年限一つじゆんじよふとゆふ理まつのがり、どふしてもいかんあれがよかろふこれがよかろふかとあちらへかゝりこちらへかゝり、それ〳〵おもふよふにいかん、それ身上もおもふよふにいかんなれど、年限の理をほたる處心の理定めてくれならん〳〵、どふしてもいかん〳〵とふそく、これよふきゝわけにやならん、これ一つさとしておかねばわからん、年らひ年限なにほどたついかな事情まだか理なら〳〵の處これ一つの事情、それはをもふよふにはいかん〳〵、これ一つよくかんがへて何よの處、そふだん一つのじゆんじよふとゆふ。

△明治三十七年十二月三十一日増田亀治郎三十六歳

身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ身上とゆふ一つどふいふ事であろふとおもふ、おもふから尋る、尋るは今迄の事情事上はこれま

ので事上、日々の處事上、これまでの處十分にうけとりてあるほどに、よふ心に一つ理持つてくれにやならん、盡した理は將來末代とゆふ理である、人間といふは一代とおもうからたよりない、理は末代の理これをよふきゝわけてしつかりをさめてくれ、盡した理は將來末代のりにうけとりてある、理はきえやせんほどに、理は十分の理である、これをたのしんで一代の理にくやしひとおもふやない、これをよふきゝわけ、人間とゆふは早ひものもあれば、おそひものもある、どんなものもある、これをきゝわけて、心にまんぞくせひ、たんのふが第一である、これを前生いんねんのさんげとゆふ、これをきゝわけてなにもおもふやない、さあことばすぐにうけとるとゆふは一つ道の理と心にをさめてくれ、これしつかりと心におさめてくれ、まあ〳〵しばらくじつとなつてもならひでも、一代の心は十分の理と治めてくれるよふ、さあうけとりてあるで。

おさしづ（明治三十七年）終

昭和二年十月廿六日印刷
昭和二年十月三十日發行

非賣品

奈良縣山邊郡丹波市町字布留百十二番地
編輯兼發行者　天理教同志會
代表者　田邊要藏

大阪市南區鰻谷中之町三十九番地
印刷所　合資會社中村盛文堂
代表者　岡本省三

不許複製

315
229

終